

至大荘90周年記念

アンケート

「至大荘に還れ」

高32回 高田 明夫

今年は至大荘90周年ということで、至大荘の亭長を経験した方々へのアンケートを企画しました。

亭長という役割ができたのは、1958年で来年で60年を迎えます。戦後至大荘が開始されてから3年後、助手集団およびそのトップの亭長が至大荘における游泳指導の役割を担うようになりました。

今回のアンケートからも、その組織体制は具体的な引継ぎ物件・資料がなくとも連綿と受け継がれていることは奇跡といっても過言ではありませんし、取りまとめ役の亭長たちは時代時代で課題が異なっても、真摯に真剣に生徒指導・助手集団とし

ての最善のパフォーマンスを求めていることに感動すら覚えます。

波の比較的穏やかな内房で遠泳活動を行っている高校は多々ありますが、外房で遠泳実習を行っている高校は九段だけとなっています。

今回のアンケートは極力答えていただいた亭長たちの言葉をそのまま掲載いたします。時代とともに、変わったもの、変わらないものを90周年を機にご覧いただければと存じます。

さて、表題の「至大荘に還れ」という言葉は、2016年の至大荘行事での重要なキーワードになった言葉でした。もともとは、E班（医師から游泳を禁じられながらも、至大荘行事に参加し、浜で游泳生徒の支援などを行うメンバー）の応援活動の一環で生まれたものでした。大遠泳の生徒たちを浜から応援する方法として、模造紙1枚に1字ずつ文字

を書いて、それを芙蓉が浦から見せよう、と発案して、生徒が考えた言葉でした。

この言葉は、単に大遠泳の無事を祈る言葉からスタートした言葉でしたが、そのインパクトは、生徒たちにとって、ここが自分たちの原点、アイデンティティだという意思表示でもありました。その言葉を持っている生徒の祈り、そのような祈りの言葉で応援されている生徒の心に宿るものは、翌日の退荘式でも違う形で使われることになりました。

退荘式では、今度は担任の先生たちが生徒たちに「至大荘に還れ」というメッセージを送ったのです。すなわち、生徒たちは至大荘を去り、東京に戻り、東京の生活を再開しても、至大荘での生活を忘れず、いつかは助手として手伝いに来てほしい、という言葉に変化しました。

私がこの言葉を引用したのは、おそらくアンケートを回答頂いた亭長たちはきつと「至大荘に還」っていました。そして、その思いがこのアンケートに表現されています。この企画をきっかけとして、世代を超えた至大荘に関わった助手の皆さんが高1（中4）で訪れた至大荘、助手として活動した至大荘にもう一度還るきっかけになることを期待しております。また、世代を超えて、同じ場所で活躍した仲間同士で交流できることを期待しております。

以上。



（基本事項）

- 問1 名前
- 問2 高校時代の部活
- 問3 至大荘の経験人数・期数
- 問4 ご一緒された游泳部長
- 問5 亭長に何年目でありましたか
- 問6 亭長の時の助手の人数
- 問7 亭長の時の行事
- 問8 おおよその生徒数
- 問9 至大荘期間中の出来事
- 問10 当時の九段生の印象

（亭長活動について）

- ① 亭長になった経緯は？
- ② 亭長を引き受けた理由は？
- ③ 亭長を引き受けた時の方針は？
- ④ 助手の募集で苦勞されましたか？
- ⑤ 助手の泳力は十分でしたか？
- ⑥ 助手と至大荘に向けた会合、練習を行いましたか？

- ⑦ 初めて来る助手への指導はどのように行いましたか？
- ⑧ 至大荘が始まる前に至大荘に行つて練習をしましたか？
- ⑨ 助手たちとの思い出
- ⑩ 生徒たちとの思い出
- ⑪ 学年の先生たちとの思い出
- ⑫ 游泳部長、游泳部の先生たちとの思い出
- ⑬ 管理人さんとの思い出
- ⑭ 守谷の浜の方（漁師さん、海の家の人達、浜屋さんなど）との思い出
- ⑮ これから助手になる人達に伝えたい・期待したいことは？
- ⑯ これから亭長になるひとに伝えたい・期待したいことは？
- ⑰ あなたにとって亭長をやった経験は、人生でどのような意味を持ちましたか？
- ⑱ その他 ご意見などがありましたら、自由にお書きください。

昭和33年

森 彰英先輩

答1 森 彰英

答2 水泳部

答3 1958年(昭和33年) 1

960年 5期

答4 湯野正憲先生

答5 卒業後4年目

答6 1日平均12人、1日最多1

5人、延べ参加人数15人

答7 大遠泳、中遠泳、小遠泳、沖

船、飛び込み。その頃は途中で遠足

(鵜原理想郷)があった。

答8 1期150人、100人

答9 昭和33年の台風、昭和34

年前期の水没事故(無事に救出)

答10 優秀。個性的な子もいた。

①⑨までをまとめてお答えいたします。

私は1952年(昭和27年)の九段高校入学ですが、1年の夏に確か戦後2復活して2度目の至大荘に参加しています。当時は1学年、男子150名、女子100名。計250名で、1期を男子、2期を女子にして5泊り6日の日程だったと思います。助手という制度はなく、OBから有志が2、3名参加していたようですが、一游会からの参加はなかったように記憶しています。

従って水泳部は湯野正憲先生が部長で佐藤省吾、柳一夫という旧東京高等師範(東京教育大を経て現・筑波大)の体育科出身の先生方で構成され、まだ学生だった鈴木祐一先生、ほかに1、2名の教育大出身者が参加していたようです。とにかくこの陣容で現在の至大荘訓練と同レベル以上をこなしていたのだから湯

野先生の統率力は大変なものだと思います。

それから5年間くらいは一游会からは自由参加の形で、毎年数名が助手を務めたが、これらは学校との個別交渉のような形でした。学校側でももっと多数の助手がほしいという需要があり、また一游会としても個別交渉をやめて統一ルールを作りたいうという要求が高まったため、当時、一游会会長の斎藤寛さんと九段の校長とまの間に次の協定が成立しました。助手については一游会が人格、泳力などを勘案して信頼に足る人材の名簿を校長宛に提出する、学校側はこれを是認した個別交渉はしない、あらかじめ定められた日当を支給するなど。

この協定が成立したのが1958(昭和33)で、男女混成の2期となった最初の年で期間も6泊7日と最長になりました。

実は亭長という呼び名が生れたのはこの年からで、それも正式なものではなく、「助手は全員、一游会から派遣されてきている。学校側から何か申し入れがある場合には、すべて観海亭のリーダーを通してほしい。もし意見が合わなければ、われわれは荷物をまとめて即刻退荘する」などと冗談に言ったところから、観海亭に起居している中で年上の者を互選で「亭長」と呼ぶ慣わしになったようです。58年は、私は後期に参加しましたが、ヘッドコーチも務めていたので、半ば暗黙のうちに冗談半分「亭長」と呼ばれるようになりました。

しかしこのシステムは何よりも学校側、特に遊泳部長の湯野先生に歓迎されました。なにしろ観海亭が一枚岩になっていいるのだから指導システムを完遂させるのには好都合です。毎年助手の人選が決まると、校

長主催で「今年もよろしく」の小宴があったし、至大荘では湯野先生が何かというと、「助手の皆さんのご意見は」などと立ててくれる。考えてみると、われわれは大人の知恵にうまく乗せられていたようです。

特に思い出深いのは前、後期続けて亭長を務めた1959年です。この年も亭長という意識はなく、ただ年長で遊びの輪の中心にいるような気分で過ごしたのですが、今思い返すと衝撃的な出来事もありました。前期の大遠泳中に男子生徒がとつぜん水没する事故が発生しましたが、近くを泳いでいた藤本（当時鈴木・30回）弘子さんがまず周囲に声を掛けてから潜ったためリレー的な救助ができて大事に至りませんでした。このことは助手の団結を高く評価される一因にもなったようです。私は大学4年の夏1960年の前期亭長が最後でしたが、当時の気風

は、水泳を卒業したら、まず不文律のように至大荘助手を務める、もちろん泳力、体力に個人差はあるが、それは集団となれば何とかカバーできる（当時は泳げない生徒も多かった）、これを担当する助手は体力の消耗度が若干軽微だった）、とにかく行けば何とかなるさ、一緒に共同生活を楽しもうというらく楽天的気分で参加したようです。

事前の練習も現在の現地での訓練とは違い、現役の練習終了後のプールで耐水訓練と称して水球の真似ごとをする程度で、とにかくみんなで行こうよ、行ったら何とかなるさの楽天的なムードでした。もちろん学業やバイトが忙しい、このような集団生活には馴染めないなどの理由で不参加の人もいたが、水泳部の卒業生の7割くらいは助手に参加したというのが私の印象です。

考えてみると、亭長の仕事は集団の「ノリを作ること」ではなかったのかと思います。観海亭のノリを作り、それを至大荘ライフ全体に波及させる。水泳の指導や集団の統率には結構、微妙な頭脳を働かせていたと思います。その他では実に単細胞的な言動で毎日を過ごしていた。

悪く言えば至大荘はカルトかがった集団催眠の世界でもあった。しかし強制ではなく、皆が楽しむノリを率先して作り出すことが亭長の仕事であり。幸いにも私たちはそんな時代に恵まれたのでしよう。

いま至大荘助手の希望者が払底しているそうですね。これは当然のこととで個人の価値観やライフスタイルがこんなにも多様化している時代に、昔のような緻密と蛮勇の共存、限定された空間での青春謳歌が実現されるとは思いません。しかし学校側は至大荘の「聖地」性をブランド化し

ようとしている。その狭間で苦労されているのが現在の一游会の皆さんだと思います。

アンケートに答えながら、昔を懐かしむよりも、現在の観海亭の立ち位置について考えることしきりです。ただ60年も前の「亭長」がどんなにいい加減だったか、しかし人間的な存在感があったかを回想してしまうのです。

答⑩ 次第に盛り上がってくる。特に女子に雰囲気を作るリーダーがいた。

答⑪ ともかく湯野先生の存在感は大きい。生活班（学科担任）も個性的な人がいた。湯野さんを中心にバツクアップしていた。

答⑫

答⑬ 鈴木万蔵さんという高齢の人がいた。戦前からの至大荘を知る主

（ぬし）的存在。言葉は不明瞭だったが、味があった。

答⑭ 至大荘の協力者が多かった。

特に浜屋の若主人（我々はあんちゃんと呼んでいた）は忘れがたい。

答⑮ 余り気張らずに、自然体で参加してみたらどうですか？

答⑯ このIT時代に生身の人間と接する良い機会ではないでしょうか？

答⑰ 良くも悪くも青春の1ページ。あんなに野放図でいて、凝縮された時は二度と来ない。

答⑱



昭和37年

早間研二先輩

答1 早間研二

答2 水泳部

昭和29年初めて生徒として至大荘に参加。当時は戦後黎明期で游泳部でも試行錯誤。3期男女別に実施され、中太、星野、岡本先輩諸兄の指導を受けた。

答3 10年

答4 湯野正憲先生

答5 4年

答6 1日平均15〜20人、1日

最多20人、1日最少15人、延べ

参加人数180人

1期5泊6日 15人×6日＝90

人×2期

答7 大遠泳、小・中遠泳、沖船、飛

込み

朝礼、朝の海岸走り、海岸清掃、犬ヶ崎(飛び込み台)見学、ごあいさつ、各種レクリエーション、退荘の諸儀

答8 男子250名、女子100名

答9 低水温(18〜20℃)、紫外線

対策、台風襲来、警察病院・海上保安

庁との連携、ストーム(游泳への集団

的反抗)、溺者救助、遠泳隊列雲散、

指揮船行方不明

答10 体力・知力ともに優秀。校風

は質実剛健を目指す。ジェントルマ

ン教育を標榜する九段には床屋が常

設されていた。

答① 順番(大先輩グループからの指

示)

答② 成り行き(暗黙の指示)

答③ 全力投(球)泳

答④ 特になし(水泳部員はほとんど

助手になった)

答⑤ 十分

答⑥ 平泳ぎ指導法の研究と実践、救助法・救急法(救命救助)の講習会あり(不定期)

答⑦ 個々にOBが行う

答⑧ 前のり(前日宿泊して迎えるのが習慣)

答⑨ ごあいさつ、八代亜紀が唄う

前から夜の浜でもテクンショ踊り、

ダンチヨネ節は定番の愛唱歌だった。他に人生劇場他、愛唱歌多数。

答⑩ 水に沈むまで懸命に泳いだ。

限界まで泳いだ。中には水中で漂う

者あり、救助した。

答⑪ 無論、心配心はグツとこらえて、

游泳に関しては、十分に理解し協力的だった。

答⑫ 体力・泳力のギリギリまで追い

込むことで生徒一人一人の可能性を

引き出すことに挑戦していたようだ。

答⑬ やさしく、思いやりがあり、

一步先から援助してくれた。

答⑭ 交流会で盛大なおもてなしを受けた。感謝。浜の掃除の謝意を受けた。

答⑮ 沈む前に助けろ、沈みそうな生徒を発見しろ、予知能力を磨け、平泳ぎの指導法に精通せよ。できれば溺者救助法・救急法(とけい)の特訓が必要。

答⑯ 生徒一人一人の泳力・体力の見極め眼を養う。和の精神、常に最悪の事態の想定と備えを忘れずに。特にシュミレーションせよ。

答⑰ 一社会人としてのその後の大

学生生活・教員生活に大いに役立った。
答⑱ “心の優しさ”を第一義とする昨今の教育活動の中で、“耐える心”を養う場としての活動は極めて少ない。至大荘はそれを標榜こそしてはいないが、現代に残された希少な臨海活動であろう。今後の推移を見守りたい。

昭和39年

石田竹雪先輩

答1 石田竹雪

答2 水泳部

答3 5年9期

答4 湯野正憲先生

答5 1964年

答6 1日平均13人、1日最多1

7人

答7 大遠泳、小遠泳、沖船、飛込

み

肝試し、観海亭劇団の公演、鶴原理

想郷への遠足

答8 1クラス50～60名で8

組。至大荘は半分ずつで230名

位。当時は1年生全員参加だった。

答9 海水温が低いときがあった。

(遠泳はできるが短縮)台風接近時、助

手全員で沖まで出て波に乗ってもど
つて来る。

答10

答① 先輩がお前でもやれるかな
と。

答②

答③

答④ 助手に参加しないとそのあと

OB仲間の話に加われないようになるので、皆参加したいと考えていた。今では考えられないことだが。

答⑤ 十分と考えていた。

答⑥ なし

答⑦ 現地班別の時、経験のある人と新人が組む。

答⑧ なし

答⑨

答⑩

答⑪ 至大荘の主のような先生方

答⑫ 湯野正憲、加藤三郎、佐藤省

吾

答⑬

答⑭

答⑮

答⑯

答⑰

答⑱ 1961年(昭36)亭長は小川

堯史(27回?)だったと思う。われわれのじだいはOB・OGになれば助手として至大荘に参加するというのが普通であった。それは、ほとんどの部員が水泳部中心で廻っていたし、現役の時からたくさん先輩がプールに来て指導してくれていたし、日々の触れ合いの中で観海亭や守谷の海の話などいつも聞いていた。だから誰でも亭長をやれたし、仲間(同期)・先輩も助けてくれた。湯野先生の指導は絶大であったが、我々の話をよく聞き、観海亭には1日おいていてくれた。観海亭の縁側が海に向いていたときは、常に海を感じていられたので懐かしい。

昭和42年

赤司 久雄先輩

答1 赤司 久雄

答2 水泳部

答3 経験年数…4年 期数…半

期(6泊7日)が7回

答4 湯野正憲、加藤三郎

答5 卒業4年目



答6 正確には記憶していません

が、前期・後期ほぼ同人数で、水泳部OB12〜14人

他に教育実習の学生が2〜3名

答7 大遠泳、小遠泳、沖船、飛込み(参加生徒全員)

答8 前・後期各200名 計400名

答9 特に印象に残っているトラブル等はありません

答10

総じて素直で大人しく、問題児に手を焼かされたということはなかったように思います。

逆にやや覇気に欠けるくらいはありました。

答① 水泳部のキャプテン等年功序列で指名されていた時代、観海亭亭長もその流れだったと思います。私の卒業年次34回生は私ひとりでしたので自然に私にお鉢が回って来たと思います。

答② 前記1が理由です。

答③ 游泳部との協働作業で、従来と余り変わらなかったと思います。

答④ 水泳部OBの間では、学生は当然至大荘助手として参加するというのが当たり前の事でしたので、15人前後の頭数は常に確保されていました。

答⑤ 水泳部OBは卒業してもほぼ毎日プールに顔を出し、現役の練習の合間に泳いでいましたので、現役時代の泳力は保っていました。

答⑥ 至大荘向けの特別練習は行っていない。

答⑦ 各班2名編成だったので、初心者にはベテランと組むよう配慮した。

答⑧ 始まる2日くらい前に現地に入り、荘内・浜の準備と併せ、海での練習は行った。

答⑨ 大半のメンバーとは普段の現役の練習で殆ど毎日共に顔を合わせ

ていたもので、至大荘という特別の場所です。特別の事をやっているという感覚はなかった。生徒の前で指導者として日々成長して行く姿を見て、頼もしく感じていたように思う。

答⑩ 週間経過した時の表情は大半の生徒が明らかに変わっていた。

皆、遊遊訓練と仲間との共同生活をやり遂げたという満足感・充実感を漂わせていた。よく言う「真の九段生」になったということだろう。

答⑪ 先生の中には至大荘行事を良しとしない面々もいた。彼らに何か協力を仰ぐ局面はなかったが、体育室の先生ばかりが目立ち、担任の影は極めて薄かった。

答⑫ 余りにも湯野正憲の存在が大きく、他の遊遊部の先生たちは湯野先生の顔を窺うだけという雰囲気があった。

答⑬ 今の鈴木恵子さんのおじいさん、万蔵さんが正の管理人だった記

憶がある。観海亭のメンバーとは良好な関係だった記憶している。

答⑭ 漁師さんには遠泳の伴走船で世話になったし、浜屋さんは今の女主人さんのご両親が新婚時代だったようで、夜中によく起こされて迷惑した（笑い）と懐かしがっておられた。

地元の人たちからは九段生は歓迎されていた。九段の行事が始まって夏が来たと感じた何人もの方から聞かされた。

答⑮ 九段中等教育学校に引き継がれた九段の伝統の中で最たる行事である「至大荘」の灯は絶対に消してはならない。それを守るのが助手の役目といっても過言ではない。

九段の伝統を自分が引っ張って行くという気概で臨んで欲しい。

又、至大荘Ⅱ観海亭Ⅱ一游会という図式は消して欲しくない。九段生であれば勿論至大荘愛を皆持っている

るだろうから、誰が務めてもその伝統は引き継がれていると思うが、やはり観海亭は一游会メンバーで陣取って欲しい。

答⑬ 15と同じ。

答⑭ 九段水泳部に在籍したことが全て。現役時代のキャプテン、OBになってからの観海亭亭長、ヘッド・コーチ等を経験させてもらって、社会人としての基礎であるリーダーシップやコミュニケーション能力の養成に大いに役立ったと思っている。

答⑮ 特にありません。



昭和44年

渡辺 照正先輩

至大荘と遠泳

釣り人や漁師やヨットマンが、船の転覆によって海に投げ出され、漂流を余儀なくされることがある。あるいは航海中の船から落ちて誰にも気付かれずに置き去りにされてしまう、ということもあるかもしれない。そうした事故でもない限り、私たちが大海を一人漂うという状況を経験することはないだろう。

“水中にある”ということでは同じようなものだが、プールと大海とは、家の中と原始林ほどの違いがある。家あるいは都市という人工の環境で、私たちは自然からの様々な脅

威やリスクから護られている。大海や原始林や砂漠という地球の自然環境に人類が登場して以来、人々は他の生き物や自然の脅威からいかにして身を守り、食糧を確保するかで、様々な工夫を重ねてきた。文明あるいは都市は、いわば自然の脅威に対するシェルターとして、発展してきたといえる。

私は夏になると至大荘に出かけていく。40年以上これを続けていく。様々な仲間がこれに参加してきた。みなが賞賛する。芙蓉が浦の磯と守谷湾の砂浜。ここにも自然と人工という違いがあるようだ。芙蓉が浦には、人工的なものは一切ない。一方守谷湾は、小さな町のようにある。様々なパラソルやテントがひしめき合っている。シーズン中は海の一隅がロープで囲まれ、波や流れや砂浜こそあるが、そこはプール同然

に保護された空間である。ライフセーバーもいる……。

しかし守谷の海岸も、早朝や夕刻過ぎは、“自然に戻る”。そのような時、視線を沖に向けてじっと佇んでいると、遙か遠方から何かが近づいてくるようである。人か？そんな筈はない……しかし次から次へ……人が……。

芙蓉が浦で私は自然と一体になる。海生動物として藻や小魚やシツタカに囲まれ、それらと戯れる。ところが波が高いときは、打ち返して体は瞬く間に沖のほうへ持っていられる。手と足を必死にフル回転させて安全域に戻り安堵する。何度か繰り返す。あのまま流されていつてはどうか。沖まで出て行って犬ヶ崎を回り込み、右への流れに乗ってから守谷の浜に上陸すればよいのだ。そうしようと思うことがある。締め付けられるような湧く湧く感がくすぶ

る。しかしぎりぎりで思いとどまる。怖いのである。大海に出ることが。そこは孤立無援。何が起るかわからない。何かが起こっても対処の仕様がなない。一人で大海にいるということは、そのような状況が果てしなく続くということだろう。そのとき生身の体は、海中の食物連鎖の一部でしかない。ひと気のなくなつた夕刻の守谷の浜での“ごあいさつ”も、近頃は“ロープ粹”を越えて出て行くこともなくなつた。体力も気も弱くなつた。

半世紀ほど前、私たちは助手として至大荘にいた。うねりの強いある夏の“ごあいさつ”のとき、終えて浜へ戻る列が崩れ始め、気付くと私の後方にいた教育実習生の助手が右手の岩場の方へ流されて行く。大方の助手は既に浜へ上がり始めていた。私は彼女を追ったが寧ろ引き離されていく。岩場に近づくほどにそ

こから沖へ向かう流れは速くなる。早めに上がった助手の一人、二人が、声を発しながら岩場伝いに私たちを追って来る。一人は浮き輪を腕に抱えているが、見る間に彼女は遠のき、投げて届く距離ではない。目を見つめあつたまま、私との距離も若干広がる。一瞬、私は「助けるのは無理だ」と思った。そのとき彼女も、私に「諦められた」と思ったかもしれない。懸命に追う私の様子の變化に、気付いたかも知れない。しかしある程度沖まで出れば、流れは右に旋回し、そしてまた浜に向かう流れに乗って戻ることができる。私はそれに任せようと思った。問題は、彼女の泳力と気力がそれまで持つかどうかということだ。声は届かないので、私は腕を振ってそのような合図を送り、私も彼女を追うことを止めて早めに右に旋回し始めていた。……幸い、無事に再上陸を

果たしたが、私には、「諦められたと思われた」という自責の感が、後々長くわだかまり続けた。

50年後、守谷の浜辺に立つ。遙か遠方から何かが近づいてくるようである。人か？そんな筈はない．．．

しかし次から次へ．．．人が．．．。犬ヶ崎を回り込むのさえ尻込みするほどだから、一人で外洋に出ることなど想像も及ばない。ところがどうだ、沖から現れたのは、まさしく人ではないか。しかも次から次と．．．。

遠泳とは、未知の世界への大冒険である。一人では決してできないし、やろうとも思わない。生徒がおり、助手がおり、周囲には船が付き添い、監視船もいる。しかし外洋に出ると、多少のうねりでそれら一切が見えなくなる。それぞれに孤立無援の恐怖が突然襲う。再び仲間が姿を現す。繰り返していると、やがて

目指す陸地が見え出す。私たちは今、外洋を経て陸地を目指しているのだ。

私たちは、確かに大海にいた。大海という未知の自然を経験するため、私たちはおたがいに訓練をするのだ。一人では決してできないことのために。

遠泳。未知の危険に溢れた外洋に出るという試み。泳ぎの達者な者もそうでない者も、決して一人では行かない外洋に出る。何故出るのか、どのようにしたら出られるのか。私たちは、生を享けてからこの方、未知の世界との遭遇の繰り返しだ。遭遇する。生々しく直面する未知のリスク。どのようにしたら乗り越えられるのか。



昭和45年

高田佑次先輩

答1 高田佑次

答1 水泳部

答3 8期

答4 湯野正憲、増田先生

答5 4年目

答6 1日最多18人、1日最少1

2人、延べ参加人数20人

答7 大遠泳、沖船、飛込み、キャンプファイヤー、演劇

答8 前期・後期合わせて400人

答9 低海水温

答10 至大荘開始の1〜2日目は、男子は水禰を恥ずかしがりましたが、数日過ぎると遅しくなり、その変貌にはビックリもしました。至大荘を去る際には、ほとんどの生徒が涙を流し別れを惜しんでいました。

答① 至大荘が始まる前に、九段水泳部の練習を指導していた先輩からの勧めもあり、卒業後4年くらいの一游会員が亭長になる習わしになっていました。

答② 前項に書いた様に、亭長は義務でもあり、至大荘が好きで、喜んでなりました。

答③ 自分自身が現役時代に経験した感動を九段高校生に引き継がせたいと思い、安全を重視しまいたが、生徒には多少の強引さをもって接しました。

答④ ほとんどの一游会員が至大荘に助手として行く習慣になっていたので、逆に選択するのに苦労した思いがありました。

答⑤ 全員水泳部出身なので心配は何もありませんでした。

答⑥ ほとんどの助手が水泳部のコーチでしたので、部活後に会合をもったかもしれません。新卒以外は皆、助手経験があり、しっかりとした会合・練習をした記憶無し。

答⑦ 至大荘が始まる前での指導はこれといって行いませんでした。守谷で各班の経験のある一游会の先輩等に任せて安心していました。

答⑧ 練習は無し

答⑨ 卒業後の数年を共に生活し、先輩・後輩達は私の財産と思っており、50年経過した今も仲間としてつきあっています。

答⑩ 我々助手が生徒達を見送る際に惜別の唄を歌い、生徒全員から感謝の握手を求められ、お互いに涙を流していた思い出があります。

答⑪ 我々助手の頃は、前・後期それぞれ1週間だったと思います。その時間よく参加していただいたと思っています。

答⑫ 湯野先生は別格でしたが、増田先生、加藤三郎先生とは共に生徒のために頑張った仲間のように思っております。

答⑬ 昔は養気閣の厨房の隣あたり（トンネルを出たところ）に家があり、そこに管理人さんが住んでおり、（おばちゃん？、うじいさん？とか呼んで、面倒をみてもらいました。

答⑭ 新卒の頃は夜中に度々、浜屋に酒の買い出しに行きました。迷惑な顔もせず店を開けてくれました。

地元の漁師さん達からは、飛込みの際に海が荒れ、生徒が飛び込むのを助手が下で待つて(立ち泳ぎ)いて、その泳力に感心してくれました。遠泳の際も自分たちの船を提供してくれて、地元一体の行事でした。

答⑮ 我々からみると現助手も生徒もたいして年も変わらずにみえます。助手は先輩ですが、生徒に教える!!という立場だけでなく、一緒に楽しむ兄弟姉妹の関係を持って接してください。

答⑯ 今は必ずしも水泳部OBの方が助手ではないと聞きました。泳力等が心配ですが、泳力の確保は当然ですが、助手達がいてこそその亭長です。お互いに信頼感をもち、仲間意識を持って、子ども達と楽しく過ごしてください。

答⑰ 亭長をやったことは覚えていますが、それよりも至大荘を通じての仲間がその後の財産です。

答⑱ 至大荘は他に類のない施設です。その施設がなければ伝統ある行事もできません。その施設があっても、行事を支える先生、特に助手がいないとできません。その自負を持って頑張ってください。

昭和46年

村山勉先輩

答1 村山勉

答2 水泳部

答3 5年(浪人1年、大学4年)

答4 湯野正憲

答5 5年目

答6 1日平均20人、延べ参加人数280人

答7 すべての行事

答8 約400名(前期・後期それぞれ200名)

答9 水温の低い時の遠泳で男子生徒の途中棄権が続出。女子はやせていても皮下脂肪の関係か、男子より強かった。台風一過、波の強い中で遠泳を実施し、沖で隊列がばらばらになって苦労した。

答10

答① 伝統

答② 伝統

答③ 伝統

答④ 伝統

答⑤ ほとんどが一游会メンバーだったので問題なし。

答⑥ 特になし

答⑦ OIT

答⑧ していない

答⑨ 水温が低く寒い時は、生徒も助手も先生も状況は同じで、皮下脂肪の少ない人は苦労したと思う。特

に筋肉質な男性は、筋肉がつって1番つらかったのではと思う。

答⑩

答⑪

答⑫ 湯野先生という伝統の権化のような人がいたので我々助手は、学校の日程に従っていればよく、楽だったように思う。

答⑬

答⑭ 2週間もいて、日に焼けて、地元の漁師さんより黒くなったのが面白かった。

答⑮ 大学時代、一游会活動に専念したため大学での部活・行事に参加できず残念に思っていました。一游会のおかげで60歳、70歳になってもすぐに昔のようにお付き合いできるのは、何にも代えがたい宝だと思えます。是非、一游会を大切にしてください。

答⑯

答⑰

答⑱ 6年前東北大震災津波で2万人の方がなくなり、人間の無力さを感じざるを得ませんが、泳げること

によって救われることは日常にあると思います。泳げるということが大切に、すばらしいことか、又、自然の海がどういうものかを生徒に教えてあげてほしいと思います。海に囲まれた日本、川の多い日本で安心して生活する為に、国民皆泳を目指して水泳指導に貢献してください。

昭和46年

中尾晴夫先輩

答1 中尾晴夫

答2 水泳部

答3 4年、8期

答4 増田先生

答5 卒業4年目

答6 1日平均25人程度

答7 大遠泳、小・中遠泳、沖船、

飛込み

上記に加え、入荘・退荘時の挨拶他
答8 前期・後期のそれぞれ180人ほど

答9

答10 全般に真面目で素直

答① 前亭長からの依頼と記憶しています。



答② 母校への恩返し、重要行事の継承責任、水泳部OB会（一游会）としてのミッション等とあります。

答③ 游泳訓練の安全確保、参加生徒が達成感を味わうことへの支援。

答④ 当時は水泳部OB（学生、浪人他）にてかなり充足していたので、あまり苦労はなかったと思います。

答⑤ 游泳訓練の指導・支援者としては十分だった記憶

答⑥ 各自助手として体力・泳力を保つ為に調整していたと思います。

答⑦ 新卒向けミーティング等の実施

答⑧ 数日前に観海亭に入り、游泳練習等を実施

答⑨ 寝・食・飲酒…そして訓練を共にした堅い団結力と、年功序列を重んじた統制力でバランスを保っていた集団で過ごしたこと。

答⑩

答⑪ 至大荘においては助手達に一目置いてくれたような印象があります。

答⑫ 游泳部長他と和船の操縦訓練を実施

答⑬ 中休み（前期と後期の間）の時、アワビの刺身を作ってくれたこと。

答⑭ 新卒、2年目くらいまでは毎晩のように浜屋さんへ買い出し（深夜）に行きました。

答⑮ 母校への恩返し、重要行事の継承責任等に参画できること、このような環境があることへの感謝の思いを持って実施してください。

答⑯ 終わってみて改めて感じた「責任の重い役割」を体験し、以後の場面にて思い出すことで、自らの励みになったような気がします。

答⑰ 水泳部同期生に石村通啓君がいました。彼は18歳という若さで他界してしまいましたが、病床にて

両親に「回復したら至大荘助手で活動したい」と語っていたそうです。他界後両親は石村君の思いを受けて、和船「石村丸」を寄贈されました。「石村丸」進水式後に守谷湾にて石村君の母親が来荘時に乗船され、「石村丸」を同期一同と共に操船したことが思い出として残っております。現在「石村丸」が残っているか否かは定かではありません。

昭和48年

須貝洋一先輩

答1 須貝洋一

答2 水泳部

答3 通算12期

答4 湯野正憲、枋堀、増田三郎先生

生

答5 6年目

答6 一游会23名

答7 大遠泳、小遠泳、沖船、飛込み

答8 前・後記各およそ180名

答9 全般的おだやか、トラブル無し

答10 一游会45、47回生(1年生)

皆素直な印象

答① 順番というか巡り合わせ

答② 順送りということで、今年は俺の番だな、という理由

答③ 事故を起こさない、生徒の命を守る

答④ 苦勞しない

答⑤ 問題あると思っていなかった

答⑥ 何もしていない

答⑦ 事前に「助手必携」で予習

答⑧ していない

答⑨ 技術的な部分では問題なくやってくれていたし、観海亭生活もそれなりに楽しく過ごせたと思う。

答⑩ 特別な感想なし。

答⑪ 至大荘行事に好意的でない先生もいたようだが、楽しむ先生とは比較的良好な感じだったと記憶

答⑫ 楽しく観海亭の夜を、野球拳などで遊んだ。

答⑬ 前・後記の中目、地元料理をこちそうしていただいた。

答⑭ 時に、我々の不注意によって、注文されることは多々あり、かなりご迷惑かけたと思う。(夜中の出来事)

答⑮ 游泳時の技術的なこと(安全)は、絶対であり、海にいる時は真剣であるべし、一方、観海亭生活は大いに楽しむべし。

答⑯ 注意深く、そして楽しく。

答⑰ 自分以外を信頼すること、他の人に任せることの重大性を知ったかな

答⑱ 助手生活の大半は生徒と同じく、同じ海上にいて、目線は低く、見えてる範囲は極めて狭い。亭長の

時、船上にいてそれまでとは全く見える範囲が広がった。自分の守備範囲を全うするのは当然として、高所からの目線を知り、信頼をし、互いの意思疎通をはかることが大切だと思っています。そして1番大切なのは、次の人々に自分達が得た知識、感覚を伝えていくことだということです。

昭和51年

小林正伸先輩

答1 小林正伸

答2 水泳部

答3 5年

当時は前期、後期があり、浪人はどちらかしか参加させてくれなかった為計9期

答4 増田三郎先生、はじめの頃は栃堀先生？

答5 5年目、大学4年時

答6 1日平均20人、1日最多2人、1日最少18人、延べ参加人数25人

答7 大遠泳、小・中遠泳、沖船、飛び込み

答8 150人×2回程度

答9 至大荘では、台風、冷水塊(17〜18℃)、カツオノエボシ等いろいろと経験しましたが、私が亭長を努めた1976年は平穏な年だったと記憶しています。

答10 普通の高校生

答① 私の時代は助手は水泳部OB以外なく、大学4年生の中から亭長が決まるのが当たり前で、何も考えなくても周囲からの働きかけはありませんでした。

答② 暗黙の了解

答③ 平穏無事

答④ 私が亭長を努める1〜2年前よりサッカー部の後輩が1名助手と

して参加するようになりましたが、異例中の異例で、当時の水泳部はOBになれば助手になるのが当然の為、苦労はありませんでした。

答⑤ 大学に入り、水泳を続けているのはごくわずかで通常の誘導、大遠泳までは問題はありませんでした。が、荒天時の犬ヶ崎の下に留まる人間は少なかったです。

答⑥ 私が大学1年の頃より、日曜日に九段のプールに集まり、成功を高める為の練習をしていました。どれだけ成果があったかは不明ですが・・・。

答⑦ 助手のしおりを作って、勉強会を行っていました。内容は良く覚えていません。

答⑧ 皆無です。

答⑨ 私が助手になったばかりの頃の観海亭は不条理の館でした。先輩のいう事は絶対!!でも年々と変化

し、私が亭長の時にはかなり民主化されていたと思います。

答⑩ 生徒達の印象はあまり残っていません。ただ、女子生徒からは熱いまなざしで、人生唯一のモテた記憶です。

答⑪ 当時学年はほとんど出番がなく、裏方の存在でした。思い出はあまり残っていません。

答⑫ 大学2・3年生の時だったと思います。が、冷水塊の中大遠泳を強行し、守谷の浜に上陸する寸前で、1名の生徒が手を挙げました。当時私は大学の水泳部にも在籍し、泳力には自信がりましたが、そばに行くとは抱きつかれ、どうしようもないところに、当時游泳部長の増田先生が浮き輪を投げてくれました。2〜3mの距離でしたが、浮き輪までもたどり着けず、増田先生が船から飛込み、浮き輪を持ってきてくれ、無事に浜に上る事ができました。増田先

生は船から飛び込んだ際、メガネを海中に落とし、スベアは持っていたのですが、見つけた人にビール1ケースという賞品までつけてくれました。その日の游泳訓練が終わった後、助手全員で搜索、すぐに見つかりビール1ケースをゲットしました。増田先生には今でも申し訳なく思っています。

答⑬ 「おばやん」には大変お世話になりました。生徒達のいない中日や前日、終了後にはおばやんの手料理が楽しみで、特にひじきの煮物の味は今でも思い出します。あと至大荘から帰る時に二はおばやんにお願いし、漁師さんから直接サザエやアワビを買ってもらい、家への土産にしていました。

答⑭ 観海亭の夜の宴会は2時3時まで続くのが常で、夜中の12時頃に冷えたビールを浜屋さんに買いに行くのが若手の助手の仕事でした。

もちろん店は閉まっていますので庭にまわり、雨戸をノックして観海亭です、とお兄さんを起こし、買って帰るのですが、お兄さんは至大荘期間中寝不足だったと思います。ご迷惑をおかけしました。

答⑮ 至大荘は九段の原点です。助手がしっかりしていないと游泳訓練はできません。大変な役割ですが、これから頑張ってください。

答⑯ いろいろな考えの人をまとめるのは大変な役割ですが、生徒達に非日常の貴重な体験をしてもらうため、皆をうまくまとめて、1つの目標に向かって頑張ってください。

答⑰ 特に亭長をやったからどうこうということではありませんが、至大荘行事そのものは大きな意味を持っていると思います。大学生活の4年間は至大荘が最優先でした。至大荘で養われた気力、体力は

人生のどの場面でも役に立ったと思っています。

答⑱ 時代と共に至大荘行事も変化するし、そこに係る人も心も変化するの当然です。私が高校1年生で至大荘行事に参加する際、大問題が起きました。至大荘では男子は水禪が伝統だったのですが、ある生徒が水禪を強制するのはおかしいと新聞に書き、大きな記事になり、結果的には水禪の上に海水パンツをはいて良い事になりました。私は反発してすべて水禪で通しましたが、あと1名剣道部の友人がいた以外は、ほとんどの人はパンツを上にはいていました。ただ禪であれ、パンツであれ、高校生であのような体験ができた事は全員の人生に大きな影響を及ぼしていると思います。形は変わっても、守谷の自然に抱かれて過ごす至大荘生活は貴重な経験となり、九段生にとっては欠く事のできないこと

です。今後も継続できるように祈っています。



昭和52年

佐藤昌昭先輩

答1 佐藤昌昭

答2 水泳部

答3 5年、たぶん10期

答4 増田先生

答5 4年目

答6 1日平均20〜25人くらい

答7 夜の観海亭の飲み会の為に助手が買ってきた魚の刺身の食中毒で、助手の下痢、発熱が多発し、規模を縮小して大遠泳を行った。亭長として恥ずかしい限りだ。

答8 前期180人、後期180人

答9 ストームをかけた生徒が、興津駅まで脱走、大騒ぎになり、9月に游泳部長と反省会、始末書提出。

答10 自分を含めて、ちょっと線が細く理屈っぽい。でも、明るく文武両道というタイプもいなくはなかった。家庭的に恵まれていた人が多かったと思う。

答① 人がいなかった。前亭長の小林さんは2級上。本来なら1級上の代が引き継ぐところだが、浪人とかヘッドコーチの問題などあり、東京を離れていてもできそうな亭長を(夏だけなので)やることになった。

答② 同期や1級上がヘッドコーチをやる中で、自分だけが何も引き受けないのは申し訳なかったのだ。

答③ 生徒のあらゆる可能性を信じ、助手であるOBは何事にも柔軟に対応し、全力を尽くす。

答④ みんなそれぞれの生活があり、人数も少なく大変であったが、当時の大学生は原則前・後期の2週間参加という暗黙の了解のようなものがあり、ほとんどの人は協力してくれた。

答⑤ 距離は泳げていたが、特に男子は寒さに弱かった。

答⑥ 5月の連休明けくらいから、月2〜4回程度、寒さと距離に慣れることと、立ち泳ぎの練習をしたと思う。

答⑦ 3年以上のベテランの助手と組むようにして、1つ1つのやり方を確認した。

答⑧ 隊列を取る船を漕ぐ練習の為に
行った。

答⑨ みんなそれぞれ頑張ったと思う。
他の部活(サッカー部同期の鷹野くん)から積極的に参加してくれたのも戦力的にはとても助かった。事情はあったとは思いますが、参加できない人がいたことは仕方ないかもしれないが、残念ではあった。

答⑩ 年齢が近く、よき後輩達という感じ。泳げない子は本当につらかったと思う。随分怖いことをしたんだなと思う。

答⑪ 担任だったら足助先生が九段最後の年、犬ヶ崎から飛び込んだ。でも、言っていたとおり本当に泳げなかった。浮き輪に必死にしがみついて目を白黒させていた。助手は信頼されていたと思う。

答⑫ いろいろな人の間に入ってよくやっていただいたと思う。年齢的にも、3先生のコンビネーションが

ちょうど良い時期にご一緒できたのだと思う。

答⑬ 社会人になり、後輩達が至大荘に集まるというので、後輩の野村君のオートバイで至大荘に行った。管理人さんたちがヘルメットを脱ぐまで僕を野村君と思い、厚遇してくれた。彼と管理人さん達の厚い信頼関係を感じた。

答⑭ いろいろと迷惑をかけていたと思う。今ならとてもできないことをやらせてもらったんだと思う。浜屋さんへ真夜中何度もお酒を買いに行ったのは、やり過ぎだったと今ははっきりと思う。学校が信頼されていたと言うことだと思うけど、それに甘えてたと思う。時代だったのかな・・・。

答⑮ 水泳部を3年間やったら、とりあえず、1年は助手をやってみてください。やってみないことには、何とも言えません。

答⑯ 時代と共に変わっていったと思います。至大至剛というのは、僕なりの解釈では、若者のあらゆる可能性を信じて思いっきりやってみようという感じに今も思えます。個人としても、集団としてもその可能性を信じて精一杯やれば良いと思います。

答⑰ 人の上に立ちまとめることは向いていない人間だ、ということが嫌というほど分かった。身の程をわきまえて生きよう、と心がける大きなきっかけとなった。

答⑱ 個人とスポーツという意味では、今は随分良い時代になったと思う。目標をポジティブに語る選手が多いのにも時代を感じる。僕の高校時代は水泳部は拘束時間が長く(楽しいことも多かったが)、辞めていった同期が多かった。また、卒業後も至大荘、合宿、後輩の水泳指導とやらなくてはならない事が多く、個人は

結構後回しだった。あまりポジティブに語れる事などなかったが、社会の中の少しマイナーな場所にいるも、なんとなく前を見て生きてこられた様な気がする。

昭和53年

青木 俊行先輩

答1 青木 俊行

答2 水泳部

答3 16年 22期

答4 増田 三郎 先生

答5 4年目

答6 1日平均20人、1日最多2

5人、1日最少 18人、延べ参加

人数?人

答7 大・中・小遠泳、沖舟、飛込

み

答8 約200名期(前期・後期実

施)

答9 低温、高波、離岸流、日焼け、濃霧

答10 まじめ・素朴

答① 遊泳部長(水泳部顧問)から

答② 必然

答③ 安全第一 助手全員の総力を

結集する(適材適所)

答④ 個別MTG 他部のメンバーと

のコミュニケーションを大切にし

た。(バスケ部・サッカー部・バレー

部など 体育教官室の常連メンバー)

答⑤ 浮力不足(競泳の泳力とは違う

もの)

答⑥ 6月頃から日曜練習を実施

巻き足、あおり足 顔上げダッシュ

答⑦ 隊列練習

引っ張り練習

OUT(実施期間中、先輩助手とのペア

リングの中でOUT)

答⑧ していない。

答⑨ 逞しい姿。

答⑩ D班の沖舟での生徒の真剣な瞳

遠泳前日の夜の見廻りで泳げない生

徒がみんなが寝冷えをしないように

と毛布を掛けていた姿。(浜でどん

な形でもいいので遠泳に参加する事

を考えなさいと語りかけた生徒だっ

た。)

答⑪ 普段話したことのない先生と

の会話

答⑫ 舟からの指示と海の中での指

示の違いについて徹底的に話し合っ

た。

答⑬ おばやんからの差し入れ(冷や

したきゅうり)

答⑭ 地元の小学生が観海亭に遊び

に来ていた。

浜やさんには連日お世話になりました。

た。

答⑮

答⑯

答⑰

答⑬

昭和55年

伊藤 武司先輩

答1 伊藤 武司

答2 水泳部

答3 12期

答4 増田先生

答5 1日平均20人

答6 大遠泳、小・中遠泳、沖船、

飛込み

答7 ありすぎて書けない。

答8 前期、後期あった

答9 ありすぎて書けない。

答10 真面目な印象。

答① 1年目は水泳部で当たり前のように次はお前となったが私自身はそのころ迷っていたと思う。後輩の後押しがあつてやる気になった。2年目は増田遊泳部長から声がかかり

それが当たり前のように私も受けた。

答② 至大荘は好きだったし、1週間でも人（高校生たち）の成長を助けることができたことに大変意味を感じた。

答③ 1年目なんとか無事終わらせたい。

2年目自分たち助手を含めて人の成長を促進させる2週間にしたい。

答④ 水泳部でも至大荘助手をやらない先輩がいるし、やはり人集めでいろいろなことがあった。体育教師からの推薦メンバーを入れたことで水泳部先輩からは否定的な意見が多く出た。助手にさまざまな部活の体育教師推薦メンバーをいれるのが徐々に多くなっていたと思う。

答⑤ 泳力、助手技術をあげるための準備練習をプールが使える5月ごろからはじめた。毎日曜日に助手が学校に集まるようになった。

答⑥ 日曜日の練習の後は、だいたいい食事会、飲み会だったように記憶している。

答⑦ さまざまな形をとっていた。授業形式で教室で講義したこともあった。プールでもさまざまな練習をおこなった。

答⑧ ないと思う。

答⑨ 自分は先輩たちの受けの悪い、はつきりいつてわがまま放題する調子の合わない後輩だったと思う。先輩たちには、こんな先輩がリーダーですいませんといったところだと思える。しかし海の上では、子供たちの命を守る時には、そんな調子のあわない自分でも目を見ただけで助手同志は言葉でなく、話ができるような関係を創ってきたと思う。それは、助手と船の上の遊泳部先生たちとも言葉で話すのでなく必死で解り合おうというのを実行してきた。

答⑩ 自分が失敗したときの生徒はいまだに記憶にある。助手1年目、隊列で沖にいった海で恐怖のためにすぐ後ろの生徒が叫びながら泳ぐ事態を招いてしまった。自分が先頭だったので自分が声かければすむことだったのに出来なかった。船からの先生の叱りとばす声でなんとか沖から帰ってきたがその生徒はAクラスからBクラスにその日のうちに替わることになった。

海の上での言葉かけには、その時から逆に慎重になった、言葉をかけられなかったから、かければ良いとは思えない。生徒に接する時は何より、海の上の大自然のすばらしさの意味、隊列を組む意義、仲間がいるから一人でできないことがやれる意味、人間は必ず良い方向に成長できる可能性をもっているという確信、まだまだ言い足りない自分の思いをこめて、何も言わないで笑顔を海で

見せることが大きいと思える。それでも伝わらないときにこそ言葉を使うぐらいにしたい。

子供たちが伊藤先輩が見てくれたから完泳できました。と言われたときは助手として本当に嬉しかった。

答⑪ 助手に成って、先生と生徒の中間にすることが面白かった。一緒に飲んで観海亭で酔っぱらっている先生たちとの交流は忘れがたい。丁度前期と後期の中休みの日、守谷の海岸でのんびりしていると至大荘のほうから学年の先生が走ってくるのが見えた。その様子から何かあったと判断し「先生！！」と観光客がびつくりするほどの大声で声かけた。先生が「芙蓉が浦！」これだけで走って芙蓉が浦に着いたときは、溺れていた観光客の男性は助けあげられて意識もある状態だった。あの時、先生の様子から何かあったとして走

っていった自分がうれしかった。先生が私を見て「芙蓉が浦！」と言ってくれたことに心のつながりを感じた。

答⑫ 増田遊泳部長には亭長を務めた時には本当にお世話になりました。

1年目の亭長の時は、体調を崩された湯野先生が数年ぶりに至大荘に参加されて、助手としても初めてお会いするといった状態だった。そんな時至大荘初日の夕方、浜での反省会で亭長としての発言を湯野先生に全面否定された事があった。助手の仲間に対して「なんで俺の言うことがわからないんだ！！」この一言だけで亭長はいいと・・・
今だにこれが出来ないのが自分なのかもしれない。その時は悩み苦しみ、助手ミーツィングそっちのけで浜で夜考えつづけたことがある。ちやうどその時、増田先生と出くわし

た。先生にとっても自分の遊泳部長を否定されたような湯野先生の言葉に苦しんでいたようだ。自分は亭長として何がやれるのか、何をやるべきなのか、あの時増田先生とどのくらい話し込んだか今は記憶がおぼろげだが、長であることの意味を探った。

答⑬ 心に残るのはおばやん（今の管理のおばさんのお母さんだったかな）のことだった、1年目助手のときは、観海亭にいつでもいるのが当たり前なのにそれにある意味耐えられなかったのだろうが、保健室の稲葉先生とおばやんの家によく休み時間に行っていた。ほんとに上の先輩から助手失格と言われるナマイキだった。おばやんの作った巨大なキュウリに味噌をつけて食べたら喜んでくれてそれから毎日顔を出すとそのきゅうりが出てきた。

毎日おばやんと話し、おばやんを笑わせるのが1年目助手の心の余裕をつくってくれた。

おばやんに最後に会ったのは勝浦の病院に入院してるときにお見舞いに行った。挨拶しても顔もわからない状態だったかもしれないが個人的にさまざまなお世話を助手である私にしてくれたことに感謝した。ほどなくしておばやんは病院で亡くなられた。

答⑭ 丸八丸には本当にお世話になった。お父さんには、わざわざ漁師しかいかないうちのサザエの漁場で素潜り漁をさせてもらったり、船用釣り具を借りて魚釣りをさせてもらったり。

丸八丸の子供たちとも毎日遊びに来るので観海亭で遊んだり、かき氷を一緒に食べにいたり。

幸之助のオヤジさんには、観海亭を代表して毎年怒られた。パラソル客

を至大荘のために移動させたことに我慢がならなかったのだ。

自分より年下の助手たちにとって、は、まゆみの店が行きつけとなっていた。丁度観海亭からも声が聞こえる場所がよくて入り浸っていた。

答⑮ 一週間で何ができるかをあなぞらないで欲しい。1週間で何かを変えろなどできないとあきらめないで欲しい。教員とも違う立場の自由さを楽しんで欲しい。そして、活かして欲しい、至大荘の1週間が学校教育の場にまだあるということ。

子供たちの可能性を十二分に引き出す1週間で創って欲しい。

言葉など使わなくても通じる仲間を創って欲しい。言葉に頼らない至大荘を創って欲しい。

まず、自分が大自然のすばらしさを感じとって欲しい。大自然や世界に

対して自分の無力さとむきあって欲しい。

私が味わったこと以上の事をあなた達が至大荘で味わってほしい。

楽しんで成長していったね。

答⑬ まず何よりも遊泳部長と心を通わせて欲しい。

答⑭ 至大荘後の人生の多くの経験は、至大荘で培われた考え方ですすんでいる。

海を前に人と共にやっていくのは当たり前、人と共にこの地球で生きていくのも当たり前。

今自分がやっている仕事での毎日365日助手としてやっているようなものだ。誰かが壁をやぶれるように助手として側に寄り添う。何か問題があれば、それが解決するように、するように考え、行動する。実に小さな改革しかできないかもしれない。それでもすべてがより良い方

向への成長、発展につながる自分でありたい。

たえず何かがより良い方向になるような行為行動言動を考えて実行する。

私は事故がなければ、あと20年ぐらいでこの世を去るだろうが、その時までこの助手の考えは変わらないだろう。

答⑮



昭和57年

安田正樹先輩

答1 安田正樹

答2 水泳部、1、2年目ブレス
ト、3年目からバタフライ

答3 4年8期 (だと思いま
す。間違っていたらごめんね)

答4

答5 4年目

答6 28名。新卒一年目の時のノ
ートを後生大事にしまっておいたの
で押入から引っ張り出して見ると2
8名との記載が。

自分が亭長の時も変わらないと思
います。前期、後期の2週間を通して
参加する助手が8割程度でした。

答7 5日目の大遠泳、小・中遠
泳、沖船、ブイ回りがハイライト、
飛び込みは4日目と記憶していま
す。

答8 前期169名、後期170名

(手元に資料があった)

答9 前期の飛び込みの前夜台風が通過し、海が荒れ、翌朝早く増田先生と飛び込み台まで見に行き、中止を決定した事はいまでも鮮明に覚えています。個人的にはこの日のために1年間準備を重ねてきたので「やりたい」「この程度なら」との迷いがありありましたが安全を期して断念しました。前夜観海亭の窓が割れたのは台風のせい、と申告しましたが事実は違います。すみません。心も体も元気でエネルギー溢れる若い男女が集まるわけなので、観海亭では色々な出来事がありました。今、こうやって機会を頂くと少しづつ当時の事が思い起こされます。あの時が、皆さんの記憶の中で今でも輝いていれば幸せです。

至大荘の開始前から”旗たて山”の道の草刈り、飛び込み台までの清

掃、観海亭の庭のゴミの穴掘り、など数日前から前乗りして準備し、生徒、助手が去った後に静かになった守谷の海をみながら一杯、を完結してこそ至大荘、と勝手に決めていました。要は他にやる事が無かったのですね。

答10 学校群制度の時代で、旧制東京市立一中の日比谷、東京府立一中の九段、そして三田高校が11群というグループになっていました。

東京大学を合格をするため必死に勉強して受験した生徒、もともとレベルの高い中学からなんとなく入学した生徒、制服の縛りがないおかげハメを外してしまった者、様々な人種が入り混じっていました。体罰が皇居一周、冬は全員が柔道か剣道の寒げいこ、という校風は日比谷、三田にはない独特のものでした。

答① 前任亭長も含めベテラン助手数人の中で大よその方向性は決まり

ました。最終的に自ら手を挙げたか、同期の中で相談したかのどちらか、だったと思います。正式なプロセスとしては、一遊会総会での承認、遊泳部長の合意を経て決定したかもしれません。

答② 当時は志に燃える青年でしたから、思うところはあった筈ですが、冷静に分析すると他に亭長の役を受けられる環境の候補がいなかったということです

答③ 「強い観海亭(助手集団)を作る」が目標でした。一遊の文章を見返すと、ずいぶんと肩に力が入っていたなあ、と懐かしく思います

答④ シーズンが終わる前から翌年は4〜5名の不足が予想されたため、危機感をもって補充に奔走しました。体育の教育実習生、水泳部の同期・後輩などから候補を選出してもらい直接会って決定。泳力テストもしたかもしれませんが、気持ち

や”志”の要素を重視したと思います。

答⑤ 8割が水泳部、他も運動部出身者で固め、永力は充分でした。

答⑥ まだ寒い時期から助手候補と毎週手紙を出して意見交換を行い、特に地方へ引っ越した仲間に気を配りながら一体感を醸成しようと思いました。毎週末に九段にて練習をした記憶があります。個人的には時間がたつぷりありましたので一年かけて体を造り足腰を鍛えなおしました

答⑦ プールを借りての練習、皇居一周競争を実施したことは記憶していますが、他は、夜のコミュニケーションに力を入れただろうと思います。

同期、新人を問わず、神楽坂、新宿へ繰り出しては熱く精神論を語った筈です。

答⑧ 前述の通り、観海亭の庭のみ穴掘り、旗立て山の道の草刈りな

ど嬉々として肉体労働をし、その合間に海に出たような記憶があります

答⑨ 至大荘期間中、何かのトラブルでかつとなり助手にクビを宣告してしまった事があります。同期の間が帰路に就くその助手を引き戻し、丸く収めてくれたことを思い出します。知識も能力もない亭長をよく支えてくれました。皆さん一人一人に感謝の気持ちをお伝えしたいです。

皆、まじめで、熱い気持ちを持ち、魅力的な助手ばかりでした。

答⑩ 初日、集合した生徒達、最終日にトンネルで送り出すときの生徒達の目は忘れません。亭長の年は観海亭にエネルギーを注いでいて、助手の時代より生徒一人一人の印象は薄かったと記憶しています。

答⑪

答⑫ 湯野先生の後を継ぎ、長く遊泳部長を務められた増田先生の最後の至大荘、という年で余計に肩に力が入っていました。当時の遊泳部(体育科の先生)は、自分では足元にも及ばない様な豪傑揃いでした。この欄を書きながら「遊泳部 V.s 観海亭」という言葉が思い浮かびました。状況は正確には思い出せないのですが、この言葉を語り合ったことだけを記憶しています。助手には高いプライドと自信が求められていました。

答⑬

答⑭ 腰古井という酒をご存知ですか。至大荘を引退し33年、昨年守屋の山の上にあるその酒蔵を尋ねる機会がありました。酒蔵の社長さんから浜屋さんのご家族の様子、最近の至大荘の様子をうかがうことができ、地域の皆様に支えられているこの伝統行事を別の側面から感じる

ことができました。守谷の皆が応援してくれている至大荘です。

答⑮

答⑯ 伝統の重みを真正面から受け止め、たすきを繋げると同時に、新しい至大荘を助手仲間・生徒と一緒に創造してください。

あなたの至大荘はあなたでしか造れません。

答⑰ 組織を再構築、若手に自信を与え、自ら気づきの機会を与

え、次世代へタスキを繋いでゆく、至大荘で先輩・同期・後輩から教わり、思い描いた夢でした。よく考えると30数年経った今でも同じ事を続けています。

答⑱最後に、一遊会会長 青木さん、アンケートに送付いただいた高田さんはじめ一遊会を支える幹事の皆様に深く御礼申し上げます。

昭和58年

野村道佳先輩

答1 野村道佳

答2 水泳部

答3 6年 12期

答4 早間先生 片瓜先生 早間

先生は游泳部長1年目で游泳部の中でも割れていた

答5 5年目

答6 1日平均26人 1日最多

30人 最小24人 (程度)

のべ参加人数 450人 (程度)

答7 小・中遠泳 沖船 飛び込み

飛び込みの日の夜は観海亭助手による出し物(劇)

答8 A B1 B2 C1 C2 C3

D1 D2 D3 D4 が基本構成だったと思う

各班10名程度いたので

それが2期となると200〜240名程度ではなかったかと思われる

答9 カツオノエボシが大量発生し游泳中隊列の前にクラゲを捕るための船を設定した

答10 九段という土地でまじめなイメージがあったが、ラジカセを鳴らしながら入荘するなど、それまでとは違う明るさや軽さを持っていた。新人類という言葉が当てはまっていた。しかし退荘時には涙を流すなど、心の中にあるものは変わっていなかったと思う。

答① 観海亭の先輩と同期から。

答② 助手の年齢構成と自分の経験年数(4年経過しあと2年残っていた)。

答③ 游泳部との協調は担保しつつも、観海亭独自の知見と判断がもてるよう、助手一人一人の経験を深め、力量を高める。

答④ 前期および準備入荘時期が私大の試験と重なっているため数の確保が難しいこと。

観海亭の理不尽さに耐えられなくなつて去つていく新人の存在。

答⑤ 十分信頼に足りた。

答⑥ 春に花見で千鳥ヶ淵に宴を展開した(当時は地面で花見ができた)。

5月からは週1の游泳訓練を行い、7月に1泊で至大荘における実地訓練を行った。

答⑦ 今でいうところのOJT。経験ある助手が班に付きながら指導する。

海を読む実力と十分な泳力があり、経験の豊かな人材がそろつていて、新人をマニュアルによつて指導する必要がなかった。新人の失敗談が楽しい酒の肴だった。

答⑧ 7月に1泊で至大荘における実地訓練を行った

答⑨ 書き尽くせない 至大荘を理屈ではなく意気と思いで作つていった。

「助手をして金を得る」ことに馴染まず、生徒が帰つた後、下らない指示書などを元に浜で指令通りの行為を行い、その対価としての賃金という形で各自が収受することに納得した。

答⑩ 九段というと地味でまじめなイメージがあつたが、ラジカセを鳴らしながら入荘するなど、それまでとは違う明るさや軽さを持つていた。新人類という言葉が当てはまっていた。しかし退荘時には涙を流すなど、心の中にあるものは変わつていなかったと思う。余談であるが、時代遡つて野村が新卒であつたとき、櫓綱の整頓不良などを青木亭長に咎められ、新卒全員が観海亭横の地面に正座させられたことがあつた

が、それを見た生徒は「先輩たちは修行をしていらっしゃる」といつていた。

答⑪ それまでは「至大荘について行く」という意識が主であつたようだが、その時期より「至大荘を生かして人を育てる」気持ちを表に出しておられた。観海亭でも游泳部との話においても「今年の担任団はやる気がある」という言葉が出ていた。

答⑫ 増田先生が前年度退かれた後、新たに着任した早間先生が游泳部長となつたが、必ずしも游泳部の中において秩序ある協力体制が保たれていたとは思われない状況となつた。特に游泳部長を批判的にみる発言が、游泳部の各先生から私たちの前でも出ていた。游泳計画も、必ずしも安心できるものではなかつたため、游泳部都の協議を経て、観海亭助手幹部が具体的に詳細まで立案し、游泳部は「承認」という方法を

とった。観海亭幹部は、その立案のために、実施期間中休む時間がとれなかった時代だった。

答⑬ 恵子さんは助手のお姉さんとして暖かく毎日を支えてくれた。当時は「もんたろう爺さん」という方がいらっしやって、観海亭に足を運んでは子どもたちの話をしてくださった。悪のりが過ぎ、新畳に替えたばかりの観海亭にホースで水をまき、水浸しにしたときは、物静かなもんたろう爺さんが烈火のごとくお怒りになった。畳を全て上げて干し、改めて敷き直したが、一枚一枚がオーダーサイズのものであり、20枚以上ある畳のバズルで日が暮れ、早く帰ろうと思っていた助手がもう一晩泊まらねばならなくなったと今でもいわれる。

答⑭ こうのすけさんは至大荘行事でブイの位置が変わり、店前の浜がなくなるため、あまり快く思ってい

らっしやらなかったようだ。浜屋さん、自動販売機を増やし、夜中に起こされることが減ったため常に普通の酒屋さんとして対応してくださった。新人助手が買い物に行くといスなどをおまけでくださった。毎日ビールを2ケース配達してくださった。監視所の方々は、大遠泳になるとスピーカーで応援して下さり、温かい目を常に向けてくださっていた。漁師さんも好意的であった。操艇訓練中、併走していた漁師さんからえらく怒鳴られ、なにか悪いことをしているのかと思ったら、櫓綱をもう少し短くした方がこぎやすいということをやと教えてくださっていたのであった。

答⑮ 答⑯ 至大荘は「今を生き切る」場であると思う。過去にしがみつくとなく、形に執着することなく、今できる最良を模索して、やっ

ていつてほしい。そこで模索することが、至大荘そのものである。

答⑰ 亭長をつとめさせていたいただいたこともそうだが、助手として、至大荘を中心に一年の全てが回り、その全てを至大荘に集約して生きる、貴重な日々を送らせていただけたことに、大きく感謝している。あのように貴重な体験をした自分自身と、共に過ごした仲間に、申し訳が立たないような生き方だけはしないようにと、苦しいときはそれを思っ張ってきた。自分これまでの人生は、至大荘を経験したからこそであるといえる。

答⑱ 観海亭の建物の維持が今後とも継続的になされていくのかどうか、まただとしても躯体が風雪に耐えられるものなのかどうか、気になっている。

昭和61年

藤垣雅彦先輩

答1 藤垣雅彦

答2 水泳部

答3 5年、8期(?)

答4 渡辺篤先生

答5 5年目

答6 1日平均25人、1日最多3

0人、全てアバウトな記憶です

答7 大遠泳、小・中遠泳、沖船、

飛込み

答8 前期 140名程度

後期 140名程度

答9 トラブルは特になく

答10 硬派

答① 前亭長から

答② 5年目で、一番の経験者とな

った為

答③ 生徒ファースト、適度な緊張

感

答④ 特になし

答⑤ 十分でした

答⑥ プレ至大荘の実施、及びプー

ルでの練習

答⑦ 自分は、軍隊式で育てられま

したが、自分の亭長時代は、

「話してやってみせて」を心がけま

した

答⑧ はい

答⑨ 生徒以上に助手が成長してい

るのが目に見えてわかるのが楽しか

った。

助手時代は先輩からよく叱られたな

あ

答⑩ 初日は怖がっていたのに最終

日には涙を流して別れを惜しんでく

れたのが良い思い出です

答⑪ 亭長のときではないのです

が、A班担当の助手をした時に大貫

先生から

「今年のA班は、泳力があるから大遠泳は往復させよう」と提案されたこと

答⑫ やはり夜の飲みですね。

「タコ」をやって新人の先生をへべレケにした記憶があります。

答⑬ 「モン太さん」妙に気があつ

て自分の祖父のように接してました

答⑭ 浜屋さんへの深夜の買い出し

答⑮ なかなか経験できない仕事です。

なにより自分が一番成長できる(する)場です。

助手を楽しんでください。

答⑯ 時代が変化するなか、大変な

活動だと思えますが、今後の人生に

大いに役立つのでぜひ亭長を楽しんでください。

答⑰ 社会人になっても、チームワ

ークやコミュニケーションの大事さは同じ。至大荘生活は、人生の縮図

です

答⑮ かなり記憶が曖昧、かつ乱筆で失礼しました

昭和62年

石田 修一先輩

答1 石田 修一

答2 水泳部

答3 10期

答4 たぶん渡辺先生だったかと思っています。

答5 5年目 浪人したので大学4年生時

答6 24人前後 (A1・B2・C5・D4) 前後期とも同様

答7 大・中・小・V周り・沖船・飛び込み

答8 320人 8クラスあったと思います。

答9 大きなトラブルはありませんでしたが、波の関係で飛び込みが3

時間くらいかかりまして、岩下の助手は日焼けで目をやられ、5日目日本の参加が危ぶまれました。

答10 今とさほど変わらないと思いますが、今のほうが学力の関係で真面目に映ります。

答① 前亭長や同期の勧めもあった気がしますが、自分がやりたかったからだったと記憶しています。

答② 同上プラス至大荘が大好きだったのでしょうか。

答③ 上助手に対して新卒・2年目が多かったので、いかに早く彼らに育ってもらうかが課題でした。

答④ やはり新卒・2年目がいかに多く来てもらうかということで、4月あたりから彼らにしつこく電話していた記憶があります。今になってみれば反省しています。

答⑤ 水泳部主体だったので安心でした。

答⑥ 九段のプールで5月くらいから週1回練習していました。9割巻き足練習で残りが隊列指導練習・模擬バニック対応、教室での講義だったと思います。

巻き足はみんなで円になり、手を水面から出して、歌やタコをやっていました。軽く1時間以上はやっていたのではないのでしょうか。

答⑦ 至大練に参加してもらい、その中で基本事項を伝えていました。プレでの経験も非常に有効でした。

答⑧ 生徒と同様、ひたすら隊列で泳いでいました。隊列指導の練習をした記憶はあまりありません。

答⑨ 皆元氣よく、游泳計画も効率的に仕上げ、そのあとは上・下混じって今日の隊列指導は、あーだった、こうだったと熱く言い争っていました。自ずと知識やスキルが継承されていったのではないかと思います。

（今は計画づくりに時間をかけている印象があります。）

答⑩ 亭長時代の生徒の記憶は思い出せません。

答⑪ 今と比ベドライだったと思います。中には至大荘が好きなんだなと感じる先生もいらっちゃって、養気閣での生徒への語りにも情熱が溢れていました。

答⑫

答⑬ 年に1人変わるかわ変わらないかでしたので、ベテラン揃いでした。舟からの指示は先頭助手・生徒達に対してともに的確で、助手・生徒への個別指示はほとんどありませんでした。

答⑭ 至大荘期間中いろいろとわれわれ助手に話しかけてくれ、特に新卒・2年目は癒されたのではないでしょう。特にプレの時は、集義寮への入寮準備や風呂の用意等熱心に対応いただきました。

答⑮ プレの隊列練習で沖に出たとき、東風が強く、舟がどうにも引き返せないで困っていると、浜から双眼鏡でわれわれを見てくれていた漁師の方が漁船で引っ張ってくれました。本当に助かりました。後で漁師の方とのコミュニケーションについて、先輩から叱られた記憶があります。（もしコミュニケーションができていれば、沖に出る前に注意するようアドバイスをもらえたはず等）

答⑯ 助手は、学生だけでなく、社会人でも無理なく参加できるようになりましたので、至大荘の楽しさを体感してもらい、できるだけ長く助手を続けてほしいです。

答⑰ ずっと上の先輩でも助手として扱わなければならない気苦労は想像が付きませんが、新卒でも4050台のおっさんでも助手の長は自分です。自分の思いを貫いて、助手をリードしてほしいですね。

答⑱ 水禰で長時間遠泳にチャレンジするという日本でも数少ない貴重な場である至大荘という行事に関わることができ、貢献できたことを誇りに思います。至大荘での時間、至大荘のために費やした時間すべてが自分の宝です。



平成2年

佐々木幸一先輩

答1 佐々木幸一

答2 水泳部

答3 学生時代7年14期+平成2
6年夏に助っ人

答4 渡辺先生↓上田先生

答5 5年目(8期終了後)

答6 1日平均…23人、1日最
多…とても沢山、1日最小…?人、
延べ参加人数…?人

答7 【表行事】第1〜5グルー
(大・中・小・ブイ・沖船)、飛込
み、キャンプファイヤー、海上バー
ティー

【裏行事】寮開き(芸)、毎朝毎晩
吹き流し上げ下ろしセレモニー

(芸)、今はない中日は堤防から観
光客へごあいさつ(芸)、最終日後
は給料もらうために指令書(芸)、

観海亭にお客さまが来るたび

(芸)・・・生徒の視界外では常に
芸(※亭長はやらないがたまにや
る)

答8 330人くらいかな?(前後
期で)

答9 設問が大まかすぎていろいろ
あります。

一番大きな出来事は、救急車5台か
な? 出勤した大遠泳ですね。守谷の
沖で遠く聞いた浜中に響くサイレン
の音と回転灯が並ぶ光景はいまでも
忘れません。

ああいうことがあると当然教育委員
会から安全対策強化だの行事に緊縮
圧力がかかるので、校長をはじめ当
時の先生方は本当にご苦労されて継
続できたのだと感謝しています。

答10 泳ぎがヘタでもメチャクチ
ヤでも、とにかく「グイグイ泳ぐ」

答① 亭長になる前からいづれ亭長
をやるように言われ続けていたし、

自分もそのつもりで動いていたから
特に大きなきっかけはありませんで
した。亭長に限らず助手個々の役回
り(特に半分から上の方)は2年程
度先まで見越して配置されていまし
た。だから前亭長の高橋文平さんが
2年やったら、次は私が2年、その
あとは越川英幸、とだいたい決って
いました。

答② 自分が亭長をやるべき年だっ
たから。

答③ 「何もやらない」

答④ 私が知ってる限りいつの時代
も助手集めは大変ですよね。私のこ
ろは11班編成で23人が必須でし
たが、毎年少し足りなかったです。
その少しを集めるのに苦労しまし
た。助手集めの先鋒役は次期亭長の
仕事だったので亭長以前のほうが大
変でした。

ただ至大荘が大好きで至大荘行事を
最優先する助手が多かったので、1

年来て来年来ないという人はほぼい
ませんでした。大学卒業の年までや
るので、その年の至大荘が終わると
来年の足りない人数は読めました。
振り返ると助手集めは上層部だけが
翌夏のために行くということではな
く、新卒で夏を終えた時から1年目
なりに身近な後輩への啓蒙は自然に
行っていました。交渉という手段は
3〜4年目が行いますが、本来現役
の高校生たちを無理なく助手に導け
るのはすぐ上の先輩ではないかと思
います。

答⑤ 競泳と海での泳力は若干異な
ります。私が助手の頃おおまかに海
での泳力は十分でした。当然水泳部
以外のOB OGや水泳部OB OGで
も泳力が劣る助手はいつでもいまし
た。それでも魚のように強力に泳
げ、目を見て頷くだけで会話ができ
る経験が豊富な仲間が大勢いたの
で、チームとして海での泳力を心配

することは一度もありませんでし
た。

助手は先輩として生徒の心に介入し
なくてはならないので、浜でウロウ
ロしているライフセーバー如きとは
違って強力な泳力だけでは役不足で
すが、海での泳力は緑帽子の最低限
必要な能力です。

答⑥ 前に書いたとおり、海での泳
力に不安がないので水泳の練習はあ
まり行いませんでした。巻き足だけ
はやった時間だけ上達し楽になるの
でプールに入れば欠かしませんでした。
た。

どちらかというと助手としての思想
を共有することが重要だと考えてい
たので、全員でも個別でも良く語り
合いました。なんだかんだ口実を作
って集まっては酒も飲んだし語り合
ったし、勢い余って夜中にそのまま
至大荘へ行ってしまうなんてことも
しばしば。

人の考え方はそれぞれとよく言うけ
れど至大荘助手に限って言うなら、
突き詰めて語り合うと皆同じところ
へ辿り着くのが当時不思議だったし
私の人生でも他にありません。

答⑦ 新卒ではじめて来る助手のほ
とんどは水泳部の後輩で元々水泳部
が大きなコミュニティだったから、
部活時代の延長のようなもので特別
な指導はなかったように思います。
水泳部以外から来てくれる卒業生は
冬のころから自宅近くのファミレス
に呼び出してお茶したり、遊びに誘
ったり、春からの至大練に孤立感な
くスムーズに参加できるように心が
けました。

近年は水泳部に限らず様々な卒業生
が多く来てくれますよね。それぞれ
が助手というチームの活動を義務感
なく最優先したくなるような事前の
雰囲気作り、大事です。

答⑧ 本番前に現地で練習するのは、2週間前の土日のプレ至大荘だけでした。初めて参加する人や2年目くらいの人は現地練習の意味合いがあります、施設や浜や飛込み岩周辺などが昨年と変化していて今年の行事に支障が出ることがないかの調査が主な目的でした。

答⑨ 文面では語り尽くせません。
答⑩ 文面では語り尽くせません。
答⑪ 文面では語り尽くせません。
答⑫ 文面では語り尽くせません。
答⑬ 文面では語り尽くせません。
答⑭ 至大荘はたくさんの方の周りに迷惑をかける今時変な行事なので、周囲の人たちの理解が必要ですよ。浜のお客さんも含めて、最大奉仕しよう！
思い出はたくさんありすぎて、文面では語り尽くせません。

答⑮ 何をおいても、「馬手に3人弓手に2人 海面に緑帽子の豊かな黒い顔」です。

泳ぎがヘタなのに足が着かない海で泳ぐのがどれほど怖いか。海の中で安心して無我夢中になれるよう生徒たちの水中の柱となって下さいね。陸上ではカッコよく活躍しているのに泳ぎがヘタな生徒ほど、カッコ悪いので恥ずかしがって必死にならないもんです。浜では生徒たちの心の柱になって下さいね。
至大荘を生徒で経験した先輩だからこそ、緑帽子は後輩たちの思いを理解して行動できるはず。

答⑯ 本番が始まる前に、時間をかけて自分の至大荘への想いを仲間の助手たちとどれだけ共有できるかが私は重要だと思います。そこで共有できていれば亭長として本番でやる还有什么ないです。

あとは仲間たちが疲れ果てて動けないときに、先頭で働けということでしょうか。

とにかく亭長がやるべき仕事は本番前が勝負なので、その時を楽しんでがんばって下さい。

答⑰ 亭長をやったこと自体にあまり意味はありませんが、学生時代に助手活動に没頭した経験は人生の宝です。

「辛い（楽な）こと」「諦めない（諦める）こと」「気力が体力を制すること」「本気になること」「やりたい（やりたくない）気持ち」「心から楽しいこと」「心が痛いこと」本質は全て助手生活の中で経験しました。

答⑱ 「伝統」という言葉は嫌いなのでそういう意味はないですが、15、6歳の人生に「飛込みのような」経験は必要です。

飛込みの復活とか飛込みのような行事の新設とかを心から願っています。

平成4年

越川 英幸先輩

答1 越川 英幸

答2 水泳部

答3 6年 11期

答4 上田先生、森谷先生

答5 6年目

答6 1日平均20人

答7 大遠泳、小・中遠泳、沖船、

飛込み

答8

答9 私が亭長の年は、天候にも恵まれて両期とも順調に進みました

答10 ほとんどの生徒が真剣に至大荘に取り組み、少なからず、何か

を感じて東京に戻って行ってくれたと思います。

答① 前亭長からの勧め

答② 正直なところ、前亭長から『来年頼む』と言われれば、断れないというところですが、伝統ある至大荘、および観海亭を引き継ぎたいという使命感はあったように思います。

答③ 助手の体調管理の徹底、特に睡眠時間の確保

答④ 新卒のメンバには半期だけでもまずは参加してもらうようにすること、また、水泳部以外の卒業生からの参加者を遊泳部の先生方からの紹介などによって増やすこと。

答⑤ 全員が十分な泳力を持っているわけではありませんでしたが、それでも活躍してもらえる場面はたくさんあったと思います。（ちなみに、沖船ダッシュは亭長がトップでした㍻㍻）

答⑥ 4月頃から毎週日曜日に練習と会合を実施。

答⑦ 巻き足等の技術面だけでなく、助手の心意気を中心に指導

答⑧ 6月頃には至大荘での練習を実施

答⑨ 自分は歴代の亭長たちに比べてカリスマ性がなかったと思いますが、よくついてきてくれたと思います。

答⑩ 天候にも恵まれ、計画通りに進んだ至大荘でしたが、生徒たちも真剣に取り組んでくれていたと思います。

答⑪ 初めて至大荘に参加される先生方が助手の役割について、大変驚いていたのが印象的でした。

答⑫ 当時の游泳部長とは年齢もそれほど離れていなかったので、飲みながらいろいろと話ができたように思います。

答⑬

答⑭ 本番期間が始まる前後の日程で浜茶屋の子供たちとよく遊びましたね。

答⑮ 至大荘に参加する生徒たちが助手の先輩方から得るものは、本人たちも経験しているのである程度わかると思います。どのようなもの生徒に伝えたいかを真剣に考えて臨んで頂きたいと思います。一方で、助手という立場で至大荘に参加することによって得られるものは、必ず将来の自分の糧になると思います。

答⑯ 亭長は自分で直接生徒を指導することができません。歯がゆいこともあると思います。本番までに助手のメンバーとできる限り多く自分たちの思いをぶつけて、向かうべき方向に足並みをそろえる。本番になったら、助手を信じることに。それだけです。

答⑰ 同じ目的のために集った仲間と、真剣に向き合って、最大限の結

果を追い求める。それを達成させるためのリーダーシップの取り方はそれまでの人生では経験したことがなかったし、その経験はその後の人生において、自分のベースになったと思っています。

答⑱

平成5年

箕輪雅男先輩

答1 箕輪雅男

答2 水泳部

答3 8期

答4 上田先生

答5 3年目

答6 約20~30名

答7 大 中 小遠泳 沖船 飛び

込み

答8 4クラス×2期 約150名

×2

答9 期間中に台風、徹夜で守谷から興津に船を陸送

答10 体育系、文化系変わらず行事には積極的だったと思います

答① 前亭長から

答② 年齢、泳力、至大荘への思いを総合して前年より心構えをしました

答③ 水泳部以外の助手の参加が増えてきた頃でもあったため、泳力以前に至大荘（生徒）への思いを助手それぞれに考えてもらった

答④ 新卒の不参加率増加、大学生の期末テストへの対応に苦労したと記憶しています。

レポート等に対応可能な講義を選択するなど無理をしてもらった。

答⑤ 水泳部以外からの参加者は、当初かなり泳力的には劣っていました。沖船、DE班限定レベルでした。

答⑥ 練習はGW明けから毎週日曜の午後行いました。

陸トレ？（親睦を深めるための遊び、歩道橋挨拶） 1〜2時間

プール練習（隊列指導、巻き足、歌唱練習） 2時間

ミーティング 毎週水曜 19時〜

夜明け？

メンバー ブレインと呼ばれる4〜5名

内容 練習メニュー作成

目的 次期幹部の育成、練習内容

の目的、意義を根本から考えさせること

答⑦ 遊びから親睦を深め、経験者から体験談を語ってもらった。

答⑧ 7月初旬の土日を使いプレを行った。

飛び込み、遠泳、入退水

答⑨ 前述した泳力のなかった助手も、オフの自主練にて泳力UPしてくれたことには感動しました。

答⑩ 受け持った生徒と助手として再会したり、プライベートの守谷で声をかけてもらったこと

答⑪ 新任の先生方もいつしか艫が漕げるようになり、至大荘が好きなっていただけしたこと

答⑫ 観海亭での宴、暴力沙汰もありましたが立場、年齢の垣根を超えた本音で語り合える場所でした。

今考えるとあんなに生意気な助手の意見に真摯に耳を傾けてくれた先生方は本当に大人だったと思います。

答⑬ 恵子さんから頂いたなめろう、最高でした。

答⑭ 丸八さん、前述した台風の時は深夜にも関わらずラーメンをごちそうになりました。（スープに頭をつけて爆睡する者続出しましたが…）

浜屋さん、毎晩の訪問対応ご迷惑おかけしました。アイスのサービスは新卒だけの特権でしたね。

ビールのケース代で3万帰ってきた記憶が。100ケースも飲んでたんですね。

答⑮ 当時、助手勧誘の際に伝えたこと。「至大荘助手は精神的にも体力的にも本当に辛い。まわりの友達と比較しても10倍以上辛いと思う。けれどもそこで得られる感動は100倍以上だよ」と。

これから助手になる方たちには、まわりの先輩や先生方はの言葉に耳を傾け、とにかく一期だけでも参加して欲しいです。

答⑯ 状況、環境、体制、人間、あらゆることが変化していく中、これだけの行事を継続していくことは本当に大変なことだと思います。

当時も無意味、不条理と思えた事も期を重ね、亭長の立場になって初めて理解できたことが数多く有りま

す。当事者が改善と思うことも長期

的視野の中では改悪になることもあります。

歩道橋挨拶、宴、吹き流し、堤防芸、最終日の指令書、既に行われてないものもあるかもしれませんが、これらは本当に意義があるものだったと思います。しかしこれらが受け入れられず翌年から不参加の人がいたのも事実です。それは上の責任です。

亭長とそのまわりの人達には、ぜひとも参加してくれた助手に至大荘の本質を理解してもらえよう今の時期から語りかけをお願いします。

答⑰ 数ヶ月間、230名もの人数を束ねることはその後30年も無い経験でした。考え方の異なる人間を理解し、そしてこちらでも理解してもらう。このことは本当に難しいことでした。一晚中語り合ったり、時には力に訴えたりとこの辺は今でもやっています。

あの頃の体験でメンタル面、体力面でキツイと思えることは、その後ほとんどありませんね。

答⑱ ここ数年、同世代以上の先輩方が応援に駆けつけている状況に本当に頭が下がります。言い訳になりますがどうしても定期的に仕事の休みが取れず申し訳ありません。

今回のように少しでも至大荘に関われることがあれば、微力ながら参加させて頂ければと思います。

平成7年

小林 利浩先輩

答1 小林 利浩

答2 水泳部

答3 游泳助手5年（10期）

答4 上田淳先生

答5 4年目、5年目

答6 1日平均…約25人、1日最多…約30人、1日最少約20人
延べ参加人数…約35人（はつきり記憶していません）

答7 大遠泳、小・中遠泳、沖船、飛込み 飛び込みがなかった年があったかと思えます。はつきり記憶していません。

答8 約280人

答9 憶えていません。すみません。

答10 毎年どおりの九段生の印象だったと記憶しています。当時、亭長として生徒も見えていましたが、助手の動きなど、助手をよく見ていた記憶が強いです。

答① 先輩方から推薦されたかな？はつきり記憶していません。

答② 水泳部出身で責任を感じていましたし、自身の経験にもなると思っただから。

答③ 生徒の安全を第一にするためにどう助手を育てるのか。生徒が参加してよかったと思える行事にするためにどう助手を育てるのか。

答④ あまりありませんでした。

ただ、水泳部出身者が減り、水泳部以外の卒業生が多かったので泳力を上げていく工夫が必要であった。また、継続して助手を続けていくための声掛けなどに尽力した。

答⑤ 十分ではなかったがみんな努力していた。

答⑥ 通常の至大練のほかに、区民プールなどでの練習や、幹部が集まってファミリーレストランなどで会合を繰り返した。

答⑦ 彼らにとっても参加して良かったと思えるような助手育成。

答⑧ プレ至大荘などで練習しました。

答⑨ 九段に対して熱い想いをもった人たちでした。

答⑩ 素直な生徒だからこそ、参加して良かったと思う生徒が多かった

答⑪ 浜や海では私たちを全面協力していただき、荘内では生徒にフォローしてくださいました。良好な関係だったと思います。

答⑫ 深夜遅くまでよく言い合いになりました。感謝しています。

答⑬ 当日だけでなく、冬に遊びに行ったときなどにもご対応いただき、感謝しています。

答⑭ ホントに私たちによくしていただき、感謝の言葉以外ありません。

答⑮

答⑯

答⑰

答⑱

平成11年

河野明彦先輩

答1 河野明彦

答2 水泳部

答3 班持ち3年(6期)↓亭長1年

答4 田中武夫先生

答5 4年目

答6 1日平均23〜25人、1日

最多28人、1日最少18人、延べ

参加人数35人

答7 大遠泳、小・中遠泳を前・後期実施

答8 前期3クラス、後期4クラス
約280名

答9 天候による影響はなく、滞りなく全行程されました。

答10 自身の世代のつばさ、初日、2日目のおっぱい感じはなく、不安や弱さを見せられる素直な印象です。

答① 前亭長から禅讓された形です。

答② 理由はなかったです。同世代、仲間からの後援があったからです。

答③ 練習、本番までの行程、流れの言語化を図りました。既存の口承伝承や感じることでのスキル習得に對して革新させたいと考えました。

答④ 新卒、若い世代は助手はきつい、ネガティブな印象が強かったので、楽しくやる事と、フランクなつきあいを行いました。

答⑤ 優劣はあるものの、飛込みがない日程では問題なし。

答⑥ プールでの練習だけでなく、座学の比率を高めました。飲みにケーションは少なく、食事会やデイスカッションを多く取りました。

答⑦ マインドの醸成です。

答⑧ 7月第一土・日曜日にプレ至大莊を行いました。

答⑨ 酸いも甘いも色々と知る事が溺、たくさん助けてもらい、感謝のみです。

答⑩ 海の状況に同じがないように、生徒一人一人個性があり、色々思い出があり、言葉で表現できません。

答⑪ 学生(九段生)時代は先生に対して微塵も感じなかった事ですが、先生は大変だなあ、と感じました。生徒、行事に對しての氣遣いを知る事。

答⑫ 生意氣な振る舞いで應對しており、先生方に申し訳ない氣持ちです。観海亭を離れて、スマートな対応で游泳と接する今思います。

答⑬ 助手は海の中で、生徒達の地面になるといふ言葉がありました。が、ケイコさんをはじめ、皆さんに助手の体温・体調を氣遣い布団であり地面でした。

答⑭ よくビールをご馳走になり、閉鎖された空間、空氣(助手の集團)から解放され、酔うことのできる至福な時を提供していただきました。

答⑮ 泳力も必要ですが、自身の考え、感じることの大切に、個々のアイデンティティを持って、緑帽をかぶってください。

答⑯ 生徒のポジティブなエネルギーの力を信じて、助手と1丸となつて万全を尽くしましょう。世界一の伝統行事をやり続けるというマインドを持ち、変革し続けてほしいです。

答⑰ チームメンバーや部下に對して目を見ることが相手の体調面や表情や仕草から洞察力が身につきました。人に語ること、場面は少ないですが、(ある種)熱狂するあの空間、世界、海はどこにもなく、至大莊でしか存在しないことであり財産です。

答⑱

平成12年

石上志帆

(旧姓小澤) 先輩

答1 小澤志帆

答2 水泳部

答3 4年8期

答4 田中武夫先生

答5 4年目

答6 最多25人最小18人?

答7 飛び込み以外すべて(飛び込みはもうなくなっていました)

答8 280人くらい

答9

答10

答① 前亭長から話を受けて。

答② 女性初亭長になるということで、かなり悩みましたが、助手の人数も減り、水泳部外の助手も増える

中、伝統をここで終わらせるわけにはいかないと思い。

答③ 当時、OBの方に手伝って頂いて人数がまかなえていたところがあり、先生方水泳部も徐々に変わっていくので、いつまでもそのお手伝いを頼っていくわけにはいかないだろうと思い、これを機に現役のみ(少人数)でもできる体制、意識改革をしようと臨みました。

答④ 水泳部同期、後輩、その他知っている後輩に電話だけでなく、実際会って話し参加をお願いしていました。

答⑤ 泳力差はありましたし、4年目に男性助手もいなかったため、それで十分と言えたかどうかは・・・

答⑥ 助手全員、九段で毎週日曜練習。その後食事会。ブレインは平日でも会って話し合っていました。当時はこの形でやっていました。

答⑦ 7月頭、プレを行っていました。

答⑧

答⑨

答⑩

答⑪

答⑫

答⑬

答⑭

答⑮

答⑯

答⑰ 亭長は助手とは違い、生徒のことだけでなく、全体を見ていかなければならなかったため、あれ程までに物事に対して深く考え、真剣に取り組むことができた事は、本当に貴重な経験を積めたと思います。今でも、色々気付けて動けることは当時の経験あってこそだと自負しております。

答⑱ 形は変われど、今なお至大莊行事が行われている事は、大変うれ

しく思います。また、その歴史ある行事に助手、また亭長まで務めさせて頂いたことを誇りに思います。

あの時、無事執り行えたのは、沢山の方々からのご支援があつてからこそのもので、改めて、御礼申し上げます。今後もずっと至大荘行事が行われますことを、お祈りしております。



平成15年

宇田川 明人先輩

答1 宇田川 明人（うだがわ あきひと）

答2 男子バスケットボール部

答3 4年 6期（1年目…後期のみ）

2年目…前期途中参加、班は持たず準備、隊列指導のみ

3年目…前・後期

4年目…前・後期

答4 藤森先生

答5 4年目

答6 1日平均 13名程度、1日

最多 20名程度、1日最小 10

名程度 延べ参加人数 120、1

30人くらいでしょうか。不明確です。申し訳ございません。

答7 大遠泳、小・中遠泳、沖船

答8 283名くらいだったかと思っています。

答9 くらげの大量発生、かじめの大量発生、前期台風接近により水際で立ち上がれない程の波、引き潮があつたことを記憶しております。

答10 明るく元気で素直で感受性が強い。初日から最終日の変化、成長が大きかったと思います。

答① 前亭長より引継いでいただきました。

答② 前亭長の意志を受け継ぎ、より良い至大荘作りに貢献したいと思ったこと。

伝統行事を後輩へ引き継ぐため。

答③ ①生徒ととことん向き合い、最大限成長出来る至大荘

②現役世代のみで行える至大荘

③助手も最大限成長し、それを楽しめる至大荘

④次世代への引き継ぎを行う

答④ 水泳部の方はもちろんです

が、私自身がそうであったように水泳部以外のメンバーを増やそうと声掛けしましたが、あまり増えませんでした。

答⑤ 理想を追い求めれば十分ということはないのかと思いますが、私自身も含め、十分であったとは言えないと思います。私が亭長を務めさせていただいた際は、1年上の先輩もほぼ全員手伝っていただいておりますのでカバーしていただきました。

答⑥ (会合) 前年の至大荘終了後、反省会を行い、その後は次年度の主要メンバー数名と週1度、至大荘の意義目的から始まり、一つ一つの定義、意味を再確認し、自らの至大荘作りを行いました。

(練習) 座学での上記定義、意味の講義、プールでの隊列指導練習、実際に守谷海岸での隊列指導練習等を

行いました。期数が高くなってきたメンバーは泳力強化の自主練。九段高校のプールでも自主練習をさせていただきました。

答⑦ 全てのことには意味があるの如く、一つ一つの行動の意味について丁寧に指導していた記憶があります。【助手の背中】という言葉もある通り、口だけではなく自ら背中を示すことを心掛けておりました。

答⑧ しました。波、流れ、水際対処等、現地でしか経験出来ないことが多々ありますので重要視し、必ず参加してもらっておりました。

答⑨ 本当に沢山ありすぎて整理が出来ませんが、自分の生徒の命がかかっている隊列順では激論を飛ばし、怒鳴りあったり、中日では笑わし合ったり、無条件で信頼し、助け合え、互いに尊敬し合える仲間です。

メリハリをしつかりつけ、真剣に取り組む時はとことん真剣に楽しむときには思いっきり楽しむことが出来ていたと思います。

答⑩ 少ない経験年次ですが、色々な生徒をみさせていた感じて、忘れられないのは目の輝きです。

最終日隊列に出ていく時の目の輝き、後ろ姿のカッコ良さには毎回鳥肌が立ち、泣けてきます。

答⑪ 私が亭長を務めた頃から人数の減少、泳力の低下が進んでおりました。先生方に応援していただき、生徒のために出来ることを一緒に考えていただいたことを記憶しております。色々な面で本当に助けていただきました。

答⑫ 助手の人数、泳力面で助手側が出したい隊列、船の数、対応出来る先生の人数等でしばしば意見がぶつかりましたが、出来る方法を考え

ていただき、多くのご協力をいただき、感謝の念しかありません。

答⑬ だいさん、けいこさんを始め皆様には非常に良くしていただきました。1世代前の岩本亭長時代から至大荘期間外に浜清掃というものにも参加し、観海亭に泊まらせていただいたりしておりました。いつでも笑顔で接していただいて、けいこさん、だいさんの笑顔、会話は助手みんなの元気の源でした。

答⑭ 先輩助手の方々と比べ、漁師さんたちとの接点は減ってしまっておったと思いますが、お会いすれば気さくに接していただき、ありがたかったです。

答⑮ 自分が生まれる前から行われている伝統行事の一端を担うこと、人の成長を真近で感じること、一つのことに熱中し、努力すること、心から笑い、信頼し合える素晴らしい仲間を作ること、助手にならなければ

ば感じられないこと、体験出来ないことが沢山ありました。

伝統行事が今でも続いている意味を自らの心と体で体感してほしいです。また、同じ思いを持った仲間が沢山増えて、生徒にとってより良い至大荘が年々塗り替えられていくことを期待したいです。

答⑯ この先、ずっと続く至大荘になるよう、仲間と共に高みを目指してください。

答⑰ 責任という言葉の意味を体感することができました。伝統行事をより良くすること、そのためには背中で示すために努力をすること、仲間を信頼すること。亭長を経験させていただいた後、責任と努力、信頼は自分の生き方のベースになっていると思います。

答⑱

平成16年

徳田清夏先輩

答1 徳田清夏

答2 女子バスケット部

答3

答4 4年

答5 4年目

答6

答7 A班〜D班まで泳力別は大遠

泳から小・中遠泳、ブイターン、沖船

答8

答9 大クラゲの大量打ち上げ、海

草の大量打ち上げによる小バエの発

生

答10 素直で一生懸命

答① 前亭長から。

答② 泳力的にも精神的にも力不足は承知していましたが、同期の人数も非常に少なく、先輩や助手メンバーの支え、サポートがあったので。

答③ すべてを生徒の為に。

答④ 学年によって差はあるものの、助手に応募する方があまり多くなく、また、次年度につなげる為の対策、対応が十分ではなかったのかなというところです。

答⑤ 個人により差が大きかったですが、総合すると、人数不足もあり、十分とは言えないと思われます。

答⑥ 高校のプールをお借りして、週に1、2度の練習。(隊列指導や歌練)。先週や本番に向けての話し合い。

答⑦ プールにて、基本的な隊列指導や生徒への対応等を本番までに行いました。

答⑧ はい

答⑨ とてもとても熱く志高い人たちばかりでした。

答⑩ 初日から最終日へ向けての、まなざしや顔つきの変化が言葉では表せない感動を覚えました。

答⑪ 生徒達の成長を信じて見守ってくださる心強い存在でした。

答⑫ 当たり前のように船を自在に操って、生徒達の士気を高め、頭が下がるばかりです。

答⑬ いつでもあたたかく迎えてくださって、とてもありがたかったです。

答⑭ 中日や日程終了後に食べる海の家での食事がとてもおいしかったです。

答⑮ 変わる時代の中で、変わらない至大荘に携われることは、貴重な体験になると思います。

答⑯ “自分らしく”がなかなか難しいと思いますが、支えてくださるたくさんの方があります。

答⑰ あのととき、あの場所だったからこそできた、深く、濃い時間でした。

た。今振り返ると、多角的に捉えられることも、当時は1直線。現在母となり、我が子にも一心不乱に向き合える何かを見つけてほしいと思うようになりました。

答⑱

平成17年

宮川 拓也先輩

答1 宮川 拓也

答2 サッカー部

答3 2003年～2014年 1

2年 16期

答4 羽田先生、藤森先生、小林先生、森谷先生

答5 3年目

答6 1日平均… 20人、1日最

多… 25人、1日最少15人

延べ参加人数… 30人

答7 大遠泳、小・中遠泳、沖船

答8 280人

答9 ・台風の影響で、5日中2日全く海入れず

・浜全面「かじめ」で覆われる

・浜にクジラがうちあがる

・遠泳中、校長が船から海に落ちる

(うたた寝)

・指揮船水没 ETC・・・

答10 とにかく素直な子が多

い。至大荘の環境を受け入れ、何かを感じて帰る。

大半(8割以上)の生徒が達成感の涙を流して帰る。

答① 前亭長から

答② 理解し、支えてくれる同期がいたから

答③ 熱い想い、強い絆をもった助手集団

答④ とにかく2年目に繋げるこ

と。至大荘本番での達成感以外に、新卒時代に助手集団が魅力的だと思

えるかが勝負。ここが自分の居場所の一つだ。と決意させるだけの魅力。集団としての絆。

答⑤ 近年と比較すると泳力はあったと思うが、当時は不十分だと思っていた。その分OBの方々から力を借りていた。

答⑥ 4月から本番まで毎週日曜日 計12回 プレ至大荘で2日×2回。

そのほかに、平日プールを借りて週1回

会合は、日曜日の練習後新卒含。運営メンバーで週1回、2年目の勉強会で1回トータル週3日

強制ではなく、自主的に。

答⑦ 助手としての本番を経験していないので、生徒の前に立つことの魅力を伝える

答⑧ 6月最終週 と 7月1週目の土日に練習を実施。

答⑨ 週3日も集まり、とにかく色んなことを考え、悩みながら助手集団を作ってきた。生徒の為の行事だが、かけがえのない仲間との関係が作れたことが何よりの思い出。助手としては2年目が鬼門、助手の全体像がつかめていない中で、一人前の助手として、生徒・新卒の前に立たなければいけない。ここを乗り越え

ると、助手集団の中での自分の立ち位置や成すべきことが見えてくる。

今思うと2年目の試練も良い思い出。苦楽を共にする同期が多かったのが、自分の恵まれていたところだ

と思う

答⑩ 亭長時代、3日目午後のクラス活動時に私服で海に入って遊んでいる生徒(クラス)がいた。観海亭から、怒ったところ、一部生徒が反発。游泳部長及び担任の先生に「指示も聞けない生徒を大遠泳で守れないので、当該クラスは本番別行動を

してほしい」と申し入れた。その後のクラス会議でことの重大さに気づき、一生懸命、荘内での生活、夕食、朝礼、点呼と頑張る生徒の姿を見た。一方、観海亭では、自分の班の生徒を本番泳がせられないかもしれない事に涙する助手の姿も見た。

素直な心と熱い思いを持った九段生に心をうたれた思い出。最後は各班の助手に、本番の点呼で生徒の目を見て判断することとした。

答⑪ 特に至大荘が初めての担任の先生が、本番後の観海亭で目を丸くして、「生徒が変わった」「至大荘はすごい」と言っている姿が印象的

答⑫ 常に冷静ながらも、熱いそれぞれの想いをもって、指導されている先生方を尊敬します。

意見の食い違いや、ぶつかる事もあったが、最大限、助手の立場意向上を尊重してくれる游泳部の先生方にはいつも助けられました。

答⑬

答⑭ アワビ、ウニ、サザエの差し入れをくれたり、観海亭に遊びに来てくれたり、プライベートで遊びに行っても話しかけてくれたりと、都会にいる普通の大学生には経験できないような事をいろいろさせてもらいました。

答⑮ 色々な参加方法、関わり方があって良いと思います。少しでも九段高への思いがあって、参加してくれていることに尊敬です。同期仲間と同じ志をもち、熱く深い信頼関係を築ける環境はなかなかありません。助手集団にはそういう魅力があります。一生懸命作り上げたからこそ、5日目の生徒を見送った後の「達成感」と「ちょっとした淋しさ」。これが経験できる機会はココにしかないと思います。

答⑯ 生徒は至大荘という環境があれば、自ら学び、何かを得て、帰る

事が出来ます。これを経験してこそ九段生だと今でも思います。

どのような形であれ、「至大荘という環境」と「生徒の安全」が守られていれば、この本質は変わらないと思うので、志を同じくする仲間を多く作ってほしい。このためには、大学生活の一部を助手として費やす！と決意してもらえただけの、魅力ある助手集団を目指していった。

答⑰ 亭長時代に生徒や助手に向かって言っていた事を、はたして今の自分は本当にできているのか？と思うことがあります。特に仕事で心が折れそうになる時や、色々な事に妥協しながら落とし所を探しているときに。ふと、当時のことを思い出し、それに一生懸命答えようとする助手や生徒の姿を思い出すことで、心が正される時があります。2年

間、助手集団を背負った経験が人生の中で大きく生きています。

答⑮

平成19年

加藤 拓哉先輩

答1 加藤 拓哉

答2 無所属

答3 期数5年

答4 藤森先生、羽田先生、小林先生、森谷先生

答5 5年目

答6 1日平均17人、1日最多22人、1日最少15人

答7 大遠泳、小・中遠泳

答8

答9 特になし

答10 中等初の生徒でした。至大

荘の事を知っている生徒が少なかったせいかもしれません。初日を助手

集団全体で感じました。その中で真

剣に取り組む生徒の姿を見て一致団

結し伝えきろうと決意したことを覚えて

います。

答① 宮川前亭長からの依頼

答② まだ先陣をきって泳げると思

ったから

答③ 中等への至大荘の引き継ぎ

答④ そこまで考えることができな

かったことを後悔しております。

答⑤ 個々は満たしているが人数面

で足りないところがあり、水泳部O

B・OGの方々にとっても助けられま

した。

答⑥ 練習計画から本番の流れまで

をその意義を含め確認していまし

た。

答⑦ すべてに徹するを前提にメリ

ハリをつけて

答⑧ プレ2回、浜掃

答⑨

答⑩

答⑪

答⑫

答⑬ 中等になった際に九段高校の

OB・OGが関われない可能性もあ

ったためとても心配をかけていまし

た。結果的にはまた戻ってこれるこ

とができてよかったです。ただ、浜

掃と言いつつ夜入りするのにもかか

わらず、朝誰一人おきない助手達を

見て。。。すみませんでした。

答⑭ お酒とともに至大荘であった

出来事を楽しそうに教えてくれる姿

がとても印象的でした。

答⑮ 生徒のためにを大前提に楽し

める仲間を作って欲しいです。

答⑯ その時にあった判断ができる

ように色々な経験を積む訓練をして

欲しいと思います。

答⑰ 目標(理想)を考える大切さとそ

れを達成する手段を立案することが

仕事に役立っています。

答⑱

平成21年

齊藤 美穂先輩

答1 齊藤 美穂

答2 水泳部

答3 13年12期

答4 羽田先生、小林先生、森谷先生

答5 6年目

答6 1日平均23人、1日最多

27人、1日最少20人

覚えておりません。。。だいたいで

す。OB・OGも含めて

答7 大遠泳、小中遠泳

答8

答9 特になし

答10 クールな子が多い

答① 前亭長と前々亭長と前々々亭

長からの依頼。

答② 行事を途絶えさせないため。

答③ ・中等への至大荘の引き継ぎ・当時の2年目の育成(この代が翌年以降メインになるため)

答④ 大学のテストと本番期間がかぶるため学生人数が揃わないこと。

答⑤ 十分とは言えないが日曜日の至大練以外にも泳力練をするなどできる限りの練習をしていました。

答⑥ 練習計画の話し合い、当時の

2年目との勉強会などを週2から3回行っていました。

答⑦ 徹するを前提にはしていたが練習の厳しさについていけず初期の

段階で止めてしまう人が多かったの

で最初から厳しくしすぎず、それよりもできたことは必ず評価すること

を優先していました。また、こまめに各々から話を聞いてメンタル面の

フォローを行いました。

答⑧ プレ2回

答⑨ いい思い出ばかりです。

答⑩ 当時の話ではないですが、その年の生徒たちでその後助手になった子が何人もいます。彼らと一緒に至大荘行事に携わり彼らの成長を見届けることができたことは私にとつてとてもいい経験となりました。

答⑪ 新卒がほとんど入ってこない時代だったので亭長だった年の本番期間後に先生方には生徒が至大荘を忘れないように時々至大荘の話をしてほしいとお願いしました。結果たくさんその年の生徒が戻ってきてくれました。

答⑫

答⑬ 恵子さんと代さんには私が2年目の頃から可愛がっていただいていて毎年夏にお会いするのが楽しみでした。代さんからは亭長の年に笛をつける綱を作っていただいて今でも大切にしています。

答⑭ プレや期間中はもちろんの事、期間前後も様々な面でお世話に

平成22年

長谷川貴史先輩

答1 長谷川貴史

答2 水泳部

答3 今年で10年目、7期

答4 藤森先生、小林先生、森谷先生、森先生

答5 3年目

答6 1日平均10人

答7 大遠泳

答8 145人

答9 フィリピン沖で台風が3つ重なったときに、波打ち際のブイターミナルでさえも戻ってこれず、引つ張り多発。隊列は船上げが続出し、浜の助手が急遽応援に向かいまし

た。

答10 至って真面目でした。

答① 前亭長から。

なりました。時には美味しいものをいただくなど。。。海の幸。。。。

答⑤ 生徒に伝えるということがあるので大変なこともあるかもしれませんが、この経験が将来的に役に立つと思います。

答⑬ 「昔はこうだったから今もこうしなくてはいけない」ではなく、今は今のベストなやり方をみんなで考えて安全が保たれる範囲でできる事をやっていくのがいいと思います。

答⑰ 先の先を想像して行動すること、周りの人たちへの心配りの大切さがどんな時でも必要と実感できました。社会人になってからもこれらのことを心がけています。

答⑱

答② 人がいなかったことと、任せられたことが嬉しかったから。

答③ 新卒を大切にしよう。

答④ 一人一人と密に連絡を取ったところ、練習に参加してくれた後輩には、毎回感謝と次の勧誘をしていました。

答⑤ 不十分でしたが、後輩はよくがんばってくれました。

答⑥ 5〜7月の毎日曜日、平日も2日ほど練習していました。

答⑦ できたところは褒め、次の課題を示すようにしました。

答⑧ 3週連続でやっていました。

答⑨ 下助手が増えるにつれ、七味、からし、わさびなどを食べさせられるようになりました。

答⑩ 与えた目標以上に成長することが多く涙して帰って行ってくれたのが印象に残っています。どの年の生徒も全力で応えてくれた姿が良く残っています。

平成24年

霧島 瞬

答⑪ あごひもがほどけている…

生徒のことをよく知っているので、把握を共有したり、成長を喜んだりしました。

答⑫ 校長が船から落下する…

あつ至大荘は毎度しみじみと感動します。

答⑬ いつも笑顔で迎えてくれました。

答⑭ 九兵衛さんは、海藻の食べ方、草笛、戦時中のお話をたくさんしてくれました。

答⑮ 本気でやった分だけいい至大荘になる。

答⑯ いつでも力を貸します。

答⑰ 支えられるありがたさ
支える力を得られたうれしさ

答⑱

答1 霧島 瞬(きりしましゅん)

答2 クラブチームでサッカーをしていた為、帰宅部でした。

答3 10年10期

答4 森谷先生、藤森先生、小林先生、森先生

答5 6年目

答6 1日平均…⑤約10人⑥約20人、1日最多…⑤約15人⑥約30人、1日最少 ⑤約8人⑥約15人

人

答7 1G(大遠泳)→4G(Vターン)

5Q(沖舟)、飛び込みはなし

答8 5回生…約120人

6回生…約140人

答9 ⑤4日目の大遠泳で堀内湾に

隊列全体がよせられ、遊泳区域のロ

ープをつかまりながらあるいて退水を行った。

答10 5回生は高校2年生だったこともあり、吸収がとても早かった。2011年出来なかった分すぐアグレッシブで向上心が高く、全体でよい至大荘にしようと一致団結していた印象が強い。

6回生は全体的に頭もよく、おとなしい第一印象であった。しかし日を重ねる事に熱い気持ちがあふれ出てきて活気のある至大荘になった。

答① 長谷川と話して決めました。

答② 亭長に憧れがあった。

また亭長として個人としても、助手集団としても成長したかった。

答③ 生徒にとっても、助手にとっても楽しく何か得られる至大荘にすること

そして来年も助手をやりたいと思える助手集団をつくること

答④ 自分には助手は出来ないという生徒が多くいると感じていたので、楽しいことや学べるものがたくさんあるとプラス面をアピールした。また卒業生ならだれでも助手になれるし、どのような形でも至大荘に関われることをアピールした。

答⑤ 水泳部は泳力があるが、他の部活では緊急作業班を任せられる、あるいは隊列3列以上を任せられる人は少なかった。

答⑥ 練習が始まるまでは、浜掃に行くなど至大荘を思い出してもらえるようにした。練習は隊列練習を中心に行った。しかし練習にこられる人も毎回違っていたこと、また少人数での開催になる事もあり、踏み込んだ練習をするのはなかなか難しかった。新卒は練習に来ることが出来た回数もまちまちであったためレベルを合わせるのに苦戦した。

練習に来られない新卒は別途で来れる日を聞いて、座学を行ったり、イメージを膨らませたりして、モチベーションの維持を図った。

練習終わりはご飯を食べに行くなど交流を図った。

答⑦ 助手としてのルールを教え、練習の時間と休憩の時間のメリハリをつけ、助手としての自覚を付けることが出来るようにした。

答⑧ 7月に2回プレ至大荘を実施

答⑨ 助手OBの方々には多くのサポート、ご指導を頂き感謝ばかりです。

全体としては毎年毎年、最高の至大荘にしようと一致団結することに感動を覚えます。また自分が亭長のときにはみんなに助けられ亭長をすることができたと感謝していますし、みんなでつくりあげた助手集団を誇りに思います。

答⑩ 当時の九段生の印象で書いた通りです。

答⑪ 生徒の普段の様子や性格を教えて下さるので、大変ありがたかった。また普段の学校生活では見られない生徒の反応や変化を教えて下さったので、助手としてもうれしくもあり、去らなるモチベーションアップにつながった。

答⑫ 自分達の足りないところを代弁して下さり、とても心強かったです。

また全体の運営面からの目線や指摘は、経験としてとても大きなものとなりました。

答⑬ プレや本番以外でも浜掃などでよく連絡をし、大変お世話になりました。

けいこさんにはよくムリを言うてご迷惑をお掛けしましたが、いつも優しく、またご配慮いただき有り難いです。

答⑭ 顔も覚えてくださり、そしていつもいつもあたたかく迎えてくださり、感謝感謝です。

至大荘期間外にいつでもお話ししてくれるのでうれしいです。

くへいさんはよく顔をだしてくださったので、女子助手でくへいさんのお話し担当がいました。ちなみにくへいさんにはわかめとめかぶの違いを教えていただきました。

答⑮ 助手はすごいから自分はある風になれないという人も多いかもしれないけれど、助手はすごい人になるのではなく、助手をやった人がすごいということ。

至大荘は自分が卒業してからも母校に携わることができ唯一の行事。卒業生が後輩に伝えるということが九段の伝統であり、その気持ちが続切れなかったからこそ、戦争や震災での中止を挟んでなお、こうして90年続いているのだと思う。個人的

には「至大荘を経験して真の九段生になる」という言葉の意味は、至大荘で学んだことを活かし、前に踏み出すことであると考えている。その一つが真の九段生として後輩に伝えることであると思う。ぜひ、自分の経験した素晴らしい経験をみんなに伝えてほしい。

答⑯ 助手の人数もずっと減っているし、現役で助手集団を運営することが難しい年がずっと続いている。その年によって出来る至大荘も変わってくると思う。

しかし、亭長には自分のやりたい至大荘をやってほしいと思う。それに対して周りはサポートします。

どんな形であれ、至大荘を続けてほしい。

答⑰ 自分は亭長をやって成長したと感じました。

至大荘に関しては全体をより俯瞰してみることが出来るようになったと

思います。今何が足りないのか、どんなところをサポートするべきなのか、全体の中に自分の役割のようなものを見ることが出来るようになったと思います。

人生においても自身の成長に繋がりました。

「徹する」という一つの言葉のみで、どのような至大荘を目指し、どのような組織をどのようにつくっていくのか1から考えるという経験が出来たからです。

組織をつくり運営していく上で、PDCAサイクル(その時は意識していませんでしたが、反省をし、改善することを自然とやっていたのだと今は思います。)の実行や、常によくやるようにカイゼンを行うことの大切さ、また集団のモチベーション管理の難しさを特に学んだように感じま

平成27年

泉 雅也先輩

す。その経験が社会人生活においても活かされているように思います。また一つの目標に全員が一致して挑むことに、そして自分がその先頭にいることに大きな責任感と感動を覚えしました。「チーム一丸」ということの素晴らしさは毎年至大荘で実感します。

答⑱ 今後も至大荘がどのような形で続いていくのかは分かりませんが、自分も参加し続けたいと思いますし、どのような形であれば至大荘が続いていくことを願っております。今後も助手の人数の急激な増加はあまり期待できませんが、OBの皆さまにはどのような形であれご支援を頂ければ幸いです。

答1 泉 雅也

答2 陸上競技部

答3 5年 6期

答4 森谷先生

答5 4年目

答6 1日平均…23人、1日最

多… 30人、1日最少20人 延

べ参加人数…約45人

答7 大遠泳(1～4G)

答8 150名

答9 濃霧の影響で沖から浜が見え

ず不安要素があった

答10 おとなしく、素直に行動す

る生徒が多かった。期間中は至大荘

にやらされている意識が強かったの

で生徒たちで至大荘を作らせるよう

にさせたら主体的に取り組むように

変化した

答① 前亭長から引継ぎをしました。

答② 引継ぎをしなければずっと前亭長のままだったと思うので九段の伝統を引き継ぐために受けました。

答③ 生徒が「至大荘に参加して良かった」と思えるような行事にする
助手集団が生徒の安全を守るために、成長のきっかけになれるように
団結する

答④ 新卒の確保に苦劳しました。
新卒が練習に参加しやすい環境を作るために今までの練習の雰囲気を変え、本番期間は年齢関係なく助手集団として生活するようにしました。

答⑤ 現役のメンバーだけでは不十分だと感じたので、OBの先輩方に参加をお願いしました。

答⑥ 週に平日は泳ぎこみを中心とした練習1回、日曜に隊列指導を中心とした練習1回を行いました。

答⑦ 至大荘期間中に新卒にお願いしたいことを説明して、安全を守るために隊列指導の基礎から教えました。

答⑧ 7月の週末は至大荘で練習しました。

答⑨ 楽しいときは全員で楽しんで、つらいときは互いに助け合いながら過ごせる仲間だと思います

答⑩ 至大荘期間中は生徒に助手が成長させられることが多く、生徒と共に成長していくことが至大荘で印象深いです。

答⑪ 夜の養気閣ミーティングで荘内での生徒の様子を伝えてくださったり、至大荘手帳を拝見させてもらったりと生徒のことを教えてくださいました。

答⑫ 生徒の安全を守るために協力し至大荘期間を過ごしてきました。訓練のあとは生徒の把握をしたりし

て一緒に生徒の成長をささえてくれたと思います。

答⑬ 本番期間中をはじめ浜掃除やプレの時に周辺のサポートをして頂いて至大荘を過ごしやすくしていただいてもらい感謝しています。

答⑭ 本番期間中は大遠泳の際に漁船をだしていただき、準備期間中には船荷の手伝いもしていただいたので感謝しています

答⑮ 助手はやってみるとすごく楽しいです。毎年参加していますが、一人一人の助手が自分に出来ることをやっています。泳ぐのが苦手、恥ずかしいとか最初は不安なことが多いですが本番を終えれば至大荘に来て良かったと思えるはずなので是非参加してみてください

答⑯ 私は亭長を経験したことで至大荘をやった本当に良かったとおもいます。亭長を任された背景は人それぞれだと思いますが、生徒の安全

を守っていける体制があれば気にすることは無いと思います。今の現役助手のやりたい至大荘を目指していきけるように助手集団を引っ張っていただく下さい。

答⑰ 生徒の安全責任を担う重要な経験だったので他では出来ないような貴重な時間を過ごせました。経験してからは上に立つ人の責任や発言力や決定権が重いものだと感じています。何より自分のために真剣に動いてくれる仲間がいることが大きな自信になりました。私が亭長の時では下は大学1年生で上は社会人の先輩までいたので、年齢関係なく真剣に行事に取り組んでくれたのは嬉しかったです。

答⑱ 一游会様、昨年度に引き続き至大荘行事に参加していただきありがとうございます。今年度も本番に向けてご支援いただければと思います。どうかよろしく願します。